ミズベリング 世界会議
MIZBERING
IN OSAKA 2015.10.9-11
WORLD CONFERENCE at DOJIMA RIVER FORUM
記録集

主催：
ミズベリング世界会議運営会議
事務局：国土交通省 近畿地方整備局河川部河川環境課内

後援・協力：
（一社）水都大阪パートナーズ
ミズベリング・プロジェクト事務局
大阪商工会議所
全国水都ネットワーク
NPO 法人パブリックスタイル研究所
淀川舟運整備推進協議会
大阪府、大阪市

ミズベリング 世界会議
MIZBERING
IN OSAKA 2015.10.9-11
WORLD CONFERENCE at DOJIMA RIVER FORUM
記録集

ミズベリング 世界会議
MIZBERING
IN OSAKA 2015.10.9-11
WORLD CONFERENCE at DOJIMA RIVER FORUM

ミズベのすべてを
学び、語り、体験する3日間

ミズベリング世界会議 IN OSAKA は、水辺日本一の水都大阪を世界へ発信するとともに、国内外の先進的な取り組みを結集することで、民間活力を呼び込む手法や枠組みを議論し、水辺を活かした「ミズベ経営の実現」をめざして、2015年10月9日から11日まで3日間、大阪の堂島リバーフォーラムで開催されました。
この記録集は、3日間でおこなわれた講演やワークショップ、ディスカッションの内容を取りまとめたものですが、身近な水辺を魅力あるものに変えていくヒントが凝縮されたものにもなっています。是非ともこれを手にして、自分たちの水辺の“今”を感じるために、身近な水辺へと足を運んでみてください。

主催：ミズベリング世界会議運営会議
（事務局：国土交通省　近畿地方整備局河川部河川環境課内）

後援・協力：（一社）水都大阪パートナーズ、ミズベリング・プロジェクト事務局、
大阪商工会議所、全国水都ネットワーク、NPO 法人パブリックスタイル研究所、
淀川舟運整備推進協議会、大阪府、大阪市

水辺の未来が動き出す！
ミズベリングプロジェクト

かつての賑わいを失ってしまった、日本の水辺の新しい活用の可能性を、創造していくプロジェクトです。水辺に興味を持つ市民や企業、そして行政が三位一体となって、水辺とまちが一体となった美しい景観と、新しい賑わいを生み出すムーブメントをつぎつぎと起こしていきます。

Contents

01　目次／ミズベリング世界会議について

ミズベシンポジウム

03　［プレゼンテーション］
スティーブン・シャウアー氏
ニラモン・クンスリソムバット氏
パトリシア・ペルー氏
忽那裕樹氏
07　［ディスカッション］

ミズベワークショップ

11　イントロダクション
13　テーブル・登壇者 紹介
14　セッション１「見つける」「伝える」
15　セッション２「設える」
16　セッション３「育てる」「広げる」
17　水辺アクションブック

ミズベ未来アクション

20　大学連携・学生発表
23　［基調講演］橋爪紳也氏
24　バトルトーク

27　ミズベリング世界会議のつくりかた
29　ミズベ体験プログラム
31　登壇者一覧
33　おわりに
34　全体アンケート集計・抜粋

DAY 1

ミズベシンポジウム
Mizube Symposium

魅力ある世界の水辺の事例を一挙公開！
世界の最新情報をここで聞く!!

サンアントニオ・バンコク・パリ、そしてミズベ日本一の大阪で展開されている先進事例を通して、活動や事業を支える仕組み、民間活力の導入手法、ミズベをきっかけとしたまちの使いこなし方やマネジメント手法などを、各国がプレゼンテーションしたのち、パネルディスカッションを開催し、各国の将来展望なども披露していただきました。

Program

イントロダクション

オープニング
司会挨拶／プログラム紹介［八木早希氏、佐井秀樹氏］
シンポジウム趣旨説明［嘉名光市氏］

プレゼンテーション［4カ国］

プレゼンター紹介［八木早希氏］

サンアントニオ［スティーブン・シャウアー氏］
バンコク［ニラモン・クンスリソムバット氏］
パリ［パトリシア・ペルー氏］
大阪［忽那裕樹氏］

ディスカッション

まとめ［嘉名光市氏、佐井秀樹氏、八木早希氏］

San-antonio

United States of America

サンアントニオ（アメリカ）

国：アメリカ合衆国（テキサス州）
都市人口：約141万人（2013年）
面積：1067.3 km2
主要河川：サンアントニオ川

観光都市が持つパワーを、水辺の魅力づくりへ再投資で拡大。

本日はサンアントニオにおけるウォーターフロント開発の話をしたいのですが、大阪からも学びたいし、バンコク、パリの話も聞きたいと思っています。大阪は、多くの観光客が訪れ、魅力と経済を拡大していこうと考えられていると思いますが、サンアントニオもしかり、一朝一夕では実現することができませんでした。

まずはサンアントニオ川の話をしましょう。サンアントニオはテキサス州の中央部にあるのですが、全長約380kmのメキシコ湾に注ぐサンアントニオ川の流域はとても大きく、河川局が４つのエリアに分けて管理しています。その中心部に全長25 kmのリバーウォークがあります。
市の歴史は1700年頃にはじまりますが、1913年の水害をはじめ、昔から洪水が多かった地域です。特に壊滅的な被害をもたらした 1921年の水害からの復興のとき、治水工事やダム整備とともにリバーウォークの整備構想が検討されました。ロバー・ハックマンによる「アメリカのベニスにしたいんだ！」という想いを受けて、市民が議論を重ね、店舗やレストランを誘致し、州や連邦政府にも働きかけ、1940年頃にリバーウォークは完成しました。しかし、思ったほど経済は拡大せず、戦争も重なったために市内の空洞化が顕著となり、40年代から50年代はまったく良好な状況ではなかったのです。60年代に入り、再び市民・州政府・連邦政府がアイデアを持ち寄り、1968年にサンアントニオ国際博覧会を開催しました。万博を誘致することでリバーウォークの再生を図ったのです。これにより運河に沿って店舗やレストラン、ホテルが立ち並ぶようになり、現在ではテキサス州内で最も観光客が訪れる場所となっています。我々はこれをとても誇りに思いますが、もちろん経済的なメリットも必要だと考えています。2014年にリバーウォークがどのような経済的なメリットがあるか調査を行ったところ、毎年1150万人が訪れ、31億ドルの経済効果、31,000人の雇用を生み出しており、総じて年間134億ドルの経済的なメリットを生み出していることがわかりました。

では次に、90年代からどのようにリバーウォークを拡大していったのかというと、ダウンタウンから北に向かって伸びるミュージアムリーチと、南に向かって伸びるミッションリーチからでした。1998年には３億８千万ドルを投じて、魅力あるリバーフロント及び経済的なメリットを伴った開発を展開していきました。その際、連邦政府やNGOなどからも資金を募りました。ちなみに私たちは、ニューヨークのセントラルパークの２倍以上もある2000エーカーほどの公有地を管理・運営しています。

ミュージアムリーチでは、2007年から再生計画をはじめて2009年に終了しました。美しい都市公園に面していて、2億５千万ドルにのぼる新しい店舗やレストランなどの民間投資を生み出しました。まさにリバーウォークを延伸することが、さらなる資金を生み出す状況となっています。
一方でミッションリーチは、生態系の再生を目的としました。50年代から60年代の治水工事における排水溝などをより自然なカタチに改修していき、野生動物のすみかや人がくつろぐ場所としました。300エーカーの土地に60種類の野草を植栽し、約 23,000本もの樹木が生い茂っています。また、アラモ伝道所がテキサス州ではじめて世界遺産に指定されました。日本にはたくさん世界遺産がありますが、アメリカ合衆国では大変珍しく、まだ23番目の指定なのです。今年はより多くの観光客がここを訪れることでしょう。

サンアントニオ川の管理については、リバーインプルーブメントオーバーレイ（RIO）という組織があり、区画整理を行いつつ、エリアの保護や再生を行っています。25kmを６つのエリアで管理しており、それぞれのエリアは、住区をはじめ歴史的・文化的な特徴を持っています。ダウンタウンでは1999年からTIVという都心部の更なる改修を進める組織があるのですが、2023年までは大きな改修の予定はありません。

ダウンタウンの河川は、清潔かつ安全であるよう、40名のフルタイムのスタッフが従事しています。また24名のスタッフが観光客への案内人として働いています。
そしてPIDを使ってリバーウォークのプロモーション費用を捻出しており、企業誘致も行っています。今年はダウンタウンの区画整理も手がける予定です。

最後に、要点を整理します。一つ目は、野心的なビジョンが重要だということです。そしてビジョンは各年代ごとに更新しています。そしてその更新には市民からの意見やサポートが不可欠です。二つ目は、経済的な条件を整える必要があるということ。1940年代は不況だったのですが、その後成功が成功を生む仕組みを築くことができました。三つ目は、持続性のあるコミットメントです。市民や民間企業などが継続的に、まちづくりに関与できる状況をつくることが、とても重要なことだと思います。

presenter

Steven Schauer
（スティーブン・シャウアー）

Manager of External Communications,
San Antonio River Authority（SARA）

シャウアー氏は、サンアントニオ川の管理運営を行う行政機関であるSARAにて、行政間およびコミュニティとの関係調整や、「サンアントニオ川再生計画」など、SARAの取り組みについての広報活動を行っている。また、サンアントニオ川流域の水環境に関する、住民向け教育プログラムの作成を指揮している。さらに、SARAのスポークスマンとして、サンアントニオ地元メディアと定期的に連携しているだけでなく、全国メディアにも度々登場しているほか、国際的にも評価の高いサンアントニオ川の流域政策について、国内外からの視察者に対応し、インド、韓国、中国で行われた国際会議にて発表も行っている。

Bangkok

Thailand

バンコク（タイ）

国：タイ王国
都市人口：約824万人（2010年）
面積：1,568.7 km2
主要河川：チャオプラヤ川

合意形成のプラットフォームから生まれる、チャオプラヤ川再開発の可能性。

私からは、市民・都市計画者・バンコク政府にとって大きな夢である、チャオプラヤ川の再生のお話をしたいと思います。この取り組みは3年ほど前から始まりました。サンアントニオに比べると私たちはまだまだなのですが、現在入念な準備と計画のもとにプロジェクトを進めています。

バンコクと聞かれると、まずチャオプラヤ川をシンボルとして思い浮かばれる方が多いと思います。タイの首都であるバンコクは、かつてロマンチックな所であり、外国からは東洋のベニスとも呼ばれていました。これは、川と街と人が密接な繋がりを持っていたということだと思います。18世紀のチャオプラヤ川では、川と陸のあいだには密接な繋がりがありました。人は水の近くに住んでおり、住宅や桟橋、さらに王宮があり、フィッシュマーケットがあり、水辺に近い場所で生活していました。 200年経った今も魅力的ですが、川で生活している人は半分くらいになりました。川辺にはフェンスやゲートが作られてしまって、私有地やセミパブリックな空間が大半を占めている状況です。
例えば、リバーフロント周辺、クロントンからクロンケ橋の所が東西の両岸で合計24キロあるのですが、川辺の空間で一般市民が自由に入れるのは14.7%しかありません。いかに川辺にパブリックスペースを拡大しつつ、質を上げていくかが重要になってきています。
また公的投資もうまく機能していません。基本的なインフラも限られています。川辺のある歴史的地区は、夜7時以降になると真っ暗で何も見えなくなっていました。
一方で、治水には10年前に大きな投資が行われました。そして2011年に大洪水があり、その後さらに高い堤防が作られたのです。よって、高い堤防で川辺と陸地が隔てられた悲しい風景になっているところがあります。
このような状況を生み出した原因の一つとしては、チャオプラヤ川は両岸で全長100キロを超えており、大きな開発のチャンスが残っているのですが、地主をはじめとした様々なステークホルダーが、一緒になって夢を語るプラットホームがないという点が挙げられます。その結果、それぞれが勝手に自分の土地の周囲にゲートやフェンスを立てて、立ち入りを制限してしまっている状況です。

しかし、チャンスが訪れました。鉄道の整備に伴った、既存の船舶やボート、水路や道路の一体的な再整備です。これらが契機となり、チャオプラヤ川を再生しようという機運が高まりました。そのためにバンコク市と提携して、バンコク再生のマスタープランを初めて作ることになりました。そのなかでチャオプラヤ川は、最も戦略的に重要な開発の軸となっています。

次に、チャオプラヤ川のヤヌワ地区周辺について話をしたいと思います。ヤヌワ川は歴史を振り返ると、まさにバンコクの近代化・工業化のランドマークと言える場所なのです。文化遺産としては、寺院があります。これは江戸時代に遡るくらいの歴史を持っていて、造船所もこの近辺にあります。この地域はユニークで多様な個性を持った地域です。そして潜在的な可能性のタネになっているのがアクセスの良さです。ここがまさに鉄道と舟運の乗継拠点となっていて、毎日3万人以上の市民や観光客が使っています。
さらにチャンスを活かすためのキーポイントになっているのが、土地の所有形態です。この地域は土地所有者自体の数が少なく、全体の 85%の土地所有は政府や国営企業、もしくは寺院なのです。公益性を重視しつつ経済的な効果も生み出し続けることが、この都市再生プロジェクトで両立できることを発見できました。
ただバンコクでは、まだ都市再生という概念自体が新しすぎるため、まずは早く着手できるところからやっていこうということになり、1.2キロの遊歩道を整備することから始めました。区分された所有形態の土地を遊歩道で繋げることから始めたのです。

そして毎日多くの人が利用している船・鉄道・バスのターミナルとの接続も検討しました。築地よりもっと小規模でそれほど洗練されてはいませんが、フィッシュマーケット前も遊歩道としてネットワークさせました。ここは人々が集まる中心的な役割を担うことになります。

3年前には、国際ワークショップを東京大学、北京大学、チュラロンコン大学で組み、市民やいろいろな方に、この地域の可能性を考えてもらうための展覧会を行いました。とても好評で、アンケートでは 90%以上の人が私たちの計画を支持してくれるという結果になりました。

現在では、バンコク市民のフルサポートを得ていますが、最近政府がチャオプラヤ川の両岸から 20mずつに突き出した全長14キロの自転車専用レーンを作るというプロジェクトを立ち上げました。これが各界、学識者、様々な協会、保存活動家、地域の人達などの抗議運動を呼ぶことになっています。
チャオプラヤ川は、これからも未来への可能性を秘めた場所と言えるでしょう。

presenter

Niramon Kulsrisombat
（ニラモン・クンスリソムバット）

チュラロンコン大学 建築学部
地域都市計画学科 准教授

クンスリソムバット氏は、チュラロンコン大学で地域都市計画学の教鞭を執り、研究に携わるかたわら、バンコクにおける健全な都市空間の創出を目指す、Urban Design and Development Center (UddC)のディレクターとして、アーバンデザイン、開発プロジェクトを手掛けている。また、タイ建築協会の美術、建築保存委員会のメンバーでもある。UddCを通して関わった代表的なプロジェクトに、「バンコク都心、Kadeejeen-Khlongsan地域再生プロジェクト」や、チャオプラヤ川沿いの一部を公共のリクリエーション空間として再生する「Yannawa Riverfront 再生プロジェクト」などがある。

Paris

France

パリ（フランス）

国：フランス
都市人口：約 224 万人（2011年）
面積：105.4 km²
主要河川：セーヌ川

実験を繰り返しながら生み出される、セーヌ川沿いの都市再生。

私は APUR（パリ市都市計画アトリエ）で働いていまして、以前、セーヌ河岸のプロジェクトの担当をしていました。
セーヌ河岸の歴史をさかのぼると、大きな変化が生まれたのは 20 世紀になってからで、60 年代に高速道路が整備されました。右岸には、12キロの高速道路を整備したのですが、左岸は高速道路整備への市民からの反対の声が上がったため、1974 年に整備が途中で停止され、2キロだけになっています。当時は、ノートルダムのランドスケープが台無しになるという抗議の声が多かったようです。そして、21世紀になると、都市政策がさらに変わってきました。2001年に新市長となったベルトラン・ドラノエ氏は、セーヌ河岸で遊歩道・舟運・観光など、様々な活動をミックスしつつ展開しようとしました。

これらの整備の仕方としては、まず 1996 年に高速道路を歩行者・サイクリストが日曜日だけ使えるようにしました。そして 2002 年からは、パリ市民が夏の1カ月間、みんながバケーションに行くことにちなんで、その1ヶ月間だけビーチに変えて、歩行者・サイクリストが使えるようにしました。これがパリ・プラージュの展開です。
2010 年には、市長の発案のもと、人口密度が高いパリにおいて高速道路を何とかしなくてはいけないと考え、新しいプロジェクトが立ち上がりました。

右岸のプロジェクトの目標は、高速道路を大通りに変えて、右岸と河岸をリンクさせることでした。そしてセーヌ河岸の有名な美術館群があるので、そのそばに船着場を整備し、船でそこへ行けるようにすることも含まれました。

パレ・ド・トーキョーとケ・ブランリー美術館の前の高速道路は、一般道に改修して歩行者が直接この道路を渡れるようにしました。ちなみに、この整備は安価で簡単に改修することができました。もう一つは、チュイルリー庭園とオルセー美術館での横断なのですが、ここもゲートを設けて信号をつけるという、とても簡単な変更で済みました。
高速道路により、河川や建物だけでなく、ボートにアクセスできないところもありました。なので、波止場をつくって船着場もつくり、歩行者が建物から川辺へすぐに行けるようにしました。

続いて、左岸のプロジェクトですが、左岸のほうがより野心的な試みでした。目標としては、新しいパブリックスペースを2013年6月にオープンすることでした。オルセー美術館とエッフェル塔の間の新しいパブリックスペースは、まさに都市における実験でした。コンセプトとしては、交通量に配慮しつつ、実験的にこのスペースの潜在的な利用方法を考えようというもので、3つに分けられたエリアで、スポーツ系・文化系・生態環境系を展開しました。また洪水などが起こった時でも、元に戻せるような工夫をしました。そして、このプロジェクトは、パリの世界遺産の美しさを損なってはならないということも考慮されました。

まずグロケイルーは、以前は車しか通っておらず、河岸は使われていなかったのですが、水上庭園のような5つの小さい島を作り、ここで座ったりくつろいだりできるとても雰囲気のよいスペースになりました。生物多様性にも配慮されたもので、台船状の構造により、セーヌ川で魚が産卵できるような場所にもなっています。

次に、アレクサンドル3世橋の波止場には、橋の下を高速道路が通っていて、歩行者は河岸へ渡ることができませんでした。改修後は歩行者・サイクリストが橋の下を渡って、カフェやナイトクラブを楽しむことができる非常に人気の高いスポットに生まれ変わりました。またすべての施設は、取り外して元に戻すことができるようになっています。今では新しいボートもここに係留しています。

そしてソルフェリーノでは、特にレジャーと文化活動に焦点をあてました。以前は駐車場と高速道路しかなかったのですが、改修後は歩行者天国になりました。
ベンチは非常にシンプルなカタチですが、使用方法も柔軟に変えられるようになっています。また壁にブラックボードを設置し、子どもも大人もチョークで絵を描くこともできます。ウェブサイトで2週間前に予約すれば、コンテナを屋内スペースとして、無料で借りることもできます。例えば、演奏のリハーサルをしたり、ピクニックをしたり、ビジネスの会合をしたり、誕生パーティーを開いたり、結婚式を開催することもできます。このスペースは夜も活用できて、時にはこの階段を使ってアウトドアシアターもやっています。

これらは非常に成功したプロジェクトで、2014年には老若男女、家族連れなど 400万人が訪れました。我々のつくったオープンスペースで、今では誰もが自分の好きなように過ごせるようになりました。

今後パリは、河岸だけでなく地上部分の改修も進めていきたいと考えています。2016 年の夏からは、さらに新しいプロジェクトを右岸で行う予定で、将来的には、道路を無くしてしまうところまでを実現したいと考えています。

presenter

Patricia Pelloux
（パトリシア・ペルー）

パリ市都市計画アトリエ（APUR）

リヨン国立応用科学院、および理工系エリート養成のためのグランゼコールのひとつである国立土木学校で都市計画を専門として卒業後、同校で都市計画の技術的なコンセプション・メソッドに関して修士課程を修了。パリ都市計画アトリエ（APUR）にて、公共空間の重要なプロジェクトを手掛けた後、2009-2012 年にセーヌ河岸改造計画のディレクターを歴任し、パリ・プラージュをはじめとしたセーヌ川における再開発や将来ヴィジョンを策定・実施する。

写真提供（上段）：水と光のまちづくり推進会議

Osaka

Japan

大阪（日本）

国：日本
都市人口：約 269 万人（2015 年）
面積：225.2 km²
主要河川：大和川、淀川、大川、木津川、道頓堀川、東横堀川

水辺を使いこなすことこそが、まちを魅力的にしていく。

私は、E-DESIGN というランドスケープデザイン事務所を主宰していまして、環境デザインの仕事に携わっています。普段からいろいろなまちづくりに関わっているのですが「環境デザイン」と、その「使いこなし」、そしてそれを持続的に支える「仕組みづくり」の 3 点を意識して、社会課題の解決や美しい空間づくりに取り組んでいます。
また、大阪の水辺のまちづくりのプラットフォームである一般社団法人水都大阪パートナーズの理事でもあります。
ミズベリング世界会議ということで、水都大阪が世界の都市に勝てるのか!? という話になりがちなのですが、それよりも、大阪らしい水辺の風景を求め続けていきたいと考えています。道頓堀で有名な大阪の水辺ですが、緑あふれる中之島公園や、それをかたち作る堂島川・土佐堀川も大変魅力的な場所になってきています。10 年前から比べると、大阪の水辺は見違えるようになってきた！と言われるのはとても嬉しいことです。

そんな大阪の水辺の現代史を簡単に振り返ると、大きく四つのステージがあったと考えられます。まず第一ステージは、2001年に 内閣官房都市再生本部において、大阪の都市再生プロジェクトとして「水都大阪の再生」が、大阪府・大阪市・経済界で共有して掲げられたことが大きかったと思います。そして、行政によるハード整備、言い換えると水辺の環境づくりが進められ、2009年に府・市・経済界の協力により、イベント日数 52 日間の一大イベントである水都大阪 2009 が中之島公園において開催されました。これが第二ステージであり、水辺の使いこなしのはじまりともいえるアクションでした。また、河川敷地占用許可準則の特例措置を適用した社会実験である北浜テラスという、堤防の管理敷を民間が占用してテラスを設ける動きも、この年あたりからはじまりました。

さらに続いて第三ステージとなる水都大阪フェス 2011・2012 が開催され、「イベントから日常へ」をコンセプトとして踏まえつつ、様々な取り組みが行われました。そのなかでもフェスのディレクターズチームに権限を集めた企画・運営手法、複数年でアクションを展開できた点、ボランティアにおけるサポーターとレポーターを育てつつイベントを支えてもらった点などはとてもユニークでした。また、2009 年から大阪府によるおおさかカンヴァス推進事業も展開され、規制緩和を踏まえた社会実験としてのアートによる使いこなしが行われました。また河川敷地占用許可準則の特例措置を適用した飲食・商業施設も、河川空間や公園に相次いでオープンしていきました。

そして、第四ステージとなる 2013年に府・市・経済界は、（一社）水都大阪パートナーズを設立し、水辺の魅力をさらにスピード感を持って高めつつ、一元的に発信する体制が整えられました。この組織をベースに水都大阪フェス 2013・2015 が開催され、イベントの日常化を加速させつつ、民間事業者や舟運事業者と連携した使いこなしや様々な社会実験が行われています。例えば、中之島オープンテラスは、今年で2年目の公園占用による期間限定の飲食施設ですが、1年目は3か月だった営業期間が、今年は6カ月営業できるようになり、徐々に規制緩和が行われている状況です。また、海と川の結節点である中之島 GATE には、中央卸売市場の対岸にある、行政が持っている河川沿いの低利用地があるのですが、はじめは水都大阪フェス会場とすることで、その潜在的な魅力を発掘し、劇団の維新派による公演などを通してその魅力を発信しました。そして現在は民間事業者による中之島漁港を営業するまでに至っていまして、ここでは活魚を販売・卸売りしたり、海鮮BBQが楽しめる施設となっています。

第五ステージとも言える水都大阪の将来展望ですが、将来に向けて、様々な取り組みを現在行っています。まず一つ目は、ライトアップやイルミネーションなどの光による夜間景観の演出と水辺とのコラボレーション。二つ目は淀川から水の回廊、USJ など港湾部までの流域全体をにらんだ舟運事業の更なる活性化。三つ目は水の都と食の都をつなぐ、高級レストランとのタイアップによるクルーズや小型船による観光など舟運自体のコンテンツづくりが挙げられます。そしてこれらのプログラムや事業、拠点を繋ぎつつ、水と光の首都大阪を実現したいと思っています。また BID のような制度も適用し、様々な活動を支える仕組みを持つことができればと考えています。

最後は、只今絶賛開催中の水都大阪フェス 2015 の紹介ですが、今年も中之島公園にラバー・ダックが浮かんでいますし、道頓堀を回転すしのレーンに見立てたローリングスシ―というアート作品もご覧いただけます。水辺に面した芝生広場には、水都大阪スタイルを感じさせるほどの思い思いの過ごし方を楽しむ市民であふれています。
このようにパブリックスペースやその使いこなしの質を上げていくことで、まちが本当に魅力的なものになっていきます。みなさんもそのプロセスに関わってもらって、水辺から始まるまちづくりを広めていければという想いをメッセージとしつつ、プレゼンテーションを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

presenter

忽那裕樹

ミズベリング世界会議 in OSAKA プロデューサー

株式会社E-DESIGN代表取締役。ランドスケープデザイナー。1966年大阪府生まれ。大阪府立大学農学部緑地環境工学科卒業。景観・環境デザインをはじめ、まちづくりの活動や仕組みづくりまで、幅広いプロジェクトに携わる。庭園をはじめ公園や広場、大学キャンパス、商業・集合住宅・病院などのランドスケープのデザインとプログラムを国内外で展開。また、パークマネージメント、タウンマネージメントを通して、地域の改善や魅力向上に様々な立場で関わり、現在、官民協働の場として設立した水都大阪パートナーズの理事を務める。また、江之子島文化芸術創造センターのプロデューサー、NPO法人パブリックスタイル研究所の理事長を務める。

discussion

各国のプレゼンテーションの後、パネリストの4人とともに、スペシャルコーディネーターとして嘉名光市氏、司会進行に八木早希氏、佐井秀樹氏をお迎えして、水辺を活かしたまちづくりの手法や、各都市の将来展望などについてのパネルディスカッションをおこないました。

スペシャルコーディネーター

嘉名光市
大阪市立大学大学院
工学研究科 都市系専攻 准教授

司会進行

八木早希
アナウンサー／
ミズベコンシェルジュ

佐井秀樹
（一社）水都大阪パートナーズ
プロデューサー

パネリスト

スティーブン・シャウアー
サンアントニオ リバーオーソリティー

ニラモン・クンスリソムバット
チュラロンコン大学 建築学部
地域都市計画学科 准教授

パトリシア・ペルー
パリ市都市計画アトリエ（APUR）

忽那裕樹
ミズベリング世界会議 in OSAKA プロデューサー

八木：本日はよろしくお願いいたします。まず、さきほどのプレゼンテーションのお話を聞かれて、他都市での取組みで興味深かったことや、共感できる部分などについて、みなさんにお聞きしたいのですが、何かありましたでしょうか?

スティーブン：どの都市もすごいプロジェクトをやっていらっしゃって、本当に素晴らしいと思いました。お話を聞いて気になったことは、長期的な計画や、オペレーションやメンテナンスについてです。みなさんは、最初のエキサイトメントの後の計画はどのようにされているのでしょうか?

パトリシア：やはり継続していくということはもちろんですが、それ以上に革新を忘れてはいけないということがとても重要だと思います。パリでは、街自体を一つの大きなミュージアムと捉えていて、そこに住む人々や訪ねてくるツーリストが常に新しい経験ができるということを大切にしています。そのために、新しい美術館をたくさんつくったり、そこで新しい企画を継続して展開する。そして、こうした動きを、河岸の動きと連動させるということがポイントになってきます。

嘉名：サンアントニオでも、一年中イベントをしているというお話がありましたね。パリでも「実験」という説明をされていましたが、最初に完成系の計画があるのではなくて、実験を繰り返すなかで、市民の共感を得ていくというプロセスを大事にされています。みんなで一緒に全体像をつくりあげていく、という手法が共通しているように思いました。

スティーブン：やはり市民や民間の参画が非常に重要で、それがあったからこそサンアントニオでは新しく河川を拡大し、街の活性化につなげることができました。資金面でも民間のサポートがなければ、まず不可能でした。また行政の役人はしばしば異動や選挙で変わってしまいますが、市民が支えるとなれば、プロジェクトを継続的にサポートできます。市民のイニシアティブなしに、長期的なプロジェクトを継続することはできないと思っています。

佐井：今日お越しいただいてる方のなかには、行政の方、あるいは経済団体や企業の方もおられると思いますが、各都市で民間企業がどう関わっているのか、そのあたりをお聞かせいただきたいですね。ニラモンさんは先ほど、バンコクでは「都市再生」という概念自体がまだないと発言されてましたが、民間の関わりは、現状どうでしょうか?

ニラモン：リバーフロントの再開発には、様々な制約があります。土地所有権の問題や、どこがパートナーになってくれるのかという問題ですね。ヤナワ地区のプロジェクトでは、様々なかたちで民間企業が参加しています。土地を提供してくれたり、実行予算を「マッチングファンド」として資金提供してくれるケースもありました。橋梁の建設などに関しても、マッチングファンドで、多くの企業が出資しましょうと声を上げてくれています。パートナーシップによる連携は、このようなプロジェクトでは、とても重要なキーワードだと思います。市や政府だけではできないし、他のところでも単独では実現するのは難しいと思います。

スティーブン：サンアントニオ川の再開発においても、民間の関与はとても重要でした。土地の所有者が区間を寄贈してくれたり、官民のパートナーシップのようなかたちで、資金提供もしてくれました。パブリックインプルーブメントデストリクト（PID）という地区においては、実業界が市と一緒になって、毎年資金を提供してくれています。また、ダウンタウンエリアの活気と経済的な成功を維持するためのパートナーシップの一環として、非営利団体がアート作品などに資金を提供しているケースもあります。こうした官民のパートナーシップは、船についても言えます。大阪ほど何社もなく、1業者だけですが、利益の一部を市に提供してくれるということになりました。もうひとつは開発事業者です。公的な投資だけでは実現できませんでしたが、政府が公的な投資をした後で、そのインフラを民間も使うわけですから、Win-Win の関係が成立していると思います。

八木：忽那さんはどうでしょうか? ここは大阪と似ている部分、あるいはここはちょっと違うというところはありますか?

忽那：たくさんあるんですが、大阪でも、経済界や様々な学術の人たちが関わるプラットフォームができて、企業の参画についても、大阪は進んできていると思います。ただ、さきほどのマッチングファンドのような、お金を介在したプラットフォームづくりやエリアマネージメントが、これからもっと進んでいくといいなと思いました。

八木：私は、パトリシアさんがプレゼンテーションのなかでお話されていた、セーヌ川には騒音という概念がない、というお話が興味深かったんですが、つまり近くに人が住んでなければ、夜中に騒いでも関係ないということですよね。その意味では、中之島のあたりなど、大阪にも当てはまるんじゃないかと思うのですが、どうなんでしょうか?

忽那：いや、苦情は出ています（笑）でも、うるさいと言われるからやらないんじゃなくて、ダメだという人がいれば、じゃあ、どういう形ならできるのかと、一度やってみて考えるということができたらいいなと思っていますね。

嘉名：うるさいと言った人も、やっぱり自分も行ってみたい!っていうイベントになれば、多少うるさい時があっても、面白いことをやってるから許してやろう、となるかもしれないし、今はそういう関係を作っていこうとしていますよね。

忽那：そうですね。一方通行なやり方をすると、そういった問題が出てくるのですが、例えば自分もプログラムを提供する側にまわると、立場が変わりますよね。そうやって、ここは誰もが楽しいことを提供できる場所なんだ、ということになると変わっていくと思います。

嘉名：パリの場合だと、もともとは道路だったわけですから、道路と今のパリ・プラージュの使い方とどっちがいいの?ということですよね。車の方が便利だった、という人もいるかもしれないけど、やっぱりパブリックな空間として使えることの楽しさというのが支持されてるということなのかなと思いますが、そのあたりどうですか? やっぱり反対もありますか?

パトリシア：はい。議論自体は、2010 年頃からあって、交通規制をすることに対して反対の声もありましたが、社会実験として一度やってみましょう、と提案したんです。プロジェクトを進めるなかでも、計画の変更や、イノベーションは必要でした。本当にうまくいくかどうか確信を持てなかった部分もありましたが、継続していくなかで、市民からも合意を得ることができて、そこからは反対する意見もなくなったんです。交通量に関して言えば、パリ・プラージュの実施後、パリでは 2004 年頃と比べて 20%ほど減少しています。一方で、モビリティで移動する人の割合は多くなっているんです。カーシェアリングをしたり、自転車を使ったり、あるいは大きな車をみんなで一緒に使ったりということをしているので、全体の交通量としては少なくなってきています。

嘉名：都市を変える、大きな社会実験をしているということですね。今、モビリティの話が出ましたが、これまで車の時代の都市づくりだったのを、違う形に変えていくトライアルをしているんですね。日本では、ミズベリングのコンセプトのキーワードで「川ろうぜ!」っていうのがありますよね。やっぱり、変えていこうっていうことが、水辺に関しては大事なキーワードだろうなと思いますね。必ず成功するのか?と言われると、ちょっと見えない部分はあるけども、進めていくなかで一番良い方法を見つけ出そうという姿勢がやはり大事だと思います。

八木：そういう意味では、タイは同じようなステージにあるのかなという印象がありましたが、どうでしょうか? ニラモンさん自身のプロジェクトに関わるスタンスについても教えていただければと思います。

ニラモン：プレゼンテーションでも少しお話しましたが、バンコクでは、開発を進めるプラットフォームというものがなかったので、私たちにとっても初めての取り組みでした。3年前にリバーフロントプロジェクトを始めた時には、アーバンデザインセンターがプロデューサーのような役割をしましたが、私たちは直接の利害関係があるわけではありません。プロジェクトを進めるにあたっては、当初から全員が賛同してくれたわけではなくて、市や政府、民間、土地所有者、寺院など様々な立場の人に参加してもらえる開発のプラットフォームづくりを進めていくなかで、徐々に信頼を得られるようになりました。みなさんに空間のイメージを持ってもらったり、現状をどのように感じているかというのを調査し、十分に感触を確かめながら前進していきました。

嘉名：行政だけじゃなくて、地域の人や企業とつながって、コミュニケーションをはかりながら、一緒にまちの計画つくっていくという方法を採用されているということですね。
スティーブンさんに聞きたいのですが、リバーオーソリティーの役割として、治水というのは非常に大きいですよね。日本でも、水辺でまちづくりしたい、街を活性化させたいと思う河川の役人はたくさんいるんだけども、それは自分たちのミッションとしてなかなか認められないということが課題になっています。スティーブンさん自身も、公務員というよりビジネスマンのような印象を受けるんですが、そのあたり、サンアントニオはどうなんでしょうか?

スティーブン：リバーオーソリティーは、テキサス州が作った組織ですが、市や郡の機関ではなく、ちょうど中間に位置するようなイメージですね。河川に対しての責任を持っていますから、人々の安全を守るということ、水の水質を守るということ、またそこに生息する動植物を保全していくという役割がありますが、規制当局ではないので、我々がルール作りをしてその執行を求めるということはしません。リバーオーソリティーの局にはエンジニアもいますし、科学者もいます。意思決定は、科学的なデータに基づいて行いますので、そのデータを市や郡、連邦や州、当局とシェアするんです。科学的な根拠をベースに提案したり勧告をするという点では、政治からもかけ離れていて、ユニークなポジションだと思います。規制当局だと政治的な影響ができますが、私たちは、それが科学的根拠に基づいていると言うことができる。開発は市や郡や連邦政府からの予算ですから、私たちは言わばファシリテーターのような役割で、仲介役として立っています。市民と政府の橋渡しのような役ですね。

忽那：それは理想的な位置付けですね。企業と市民と行政が話し合う場で、何を根拠に一緒にやっていくのかということがとても明確でいいなと思いました。大阪もそれをつくり始めてるんですが、経済面やエコロジーの話とか、もう少しそういう話がきっちりできる人が関われたり、ファンが増えるようなやり方をしていきたい。それが、どんどん広がっていくようなやり方にできたらいいなと思いますね。

八木：市民目線の質問なんですが、そうなってくると、観光プロモーションと水質の管理、というのは全く管轄が変わる、いわゆるタテ割りみたいなものが生まれるイメージがあるんですけども、そういう問題を意識されることはあるのか、またそのコーディネートはどうされてるのか、何かアイデアをいただけたらと思います。

スティーブン：それは、やはり簡単なことではなくて、色んな意見があるんです。例えば水質の問題は、リバーオーソリティーにとって重要なことだけれども、他の人はそんなものはかまわない、と言ったりする。だから、市民に対しての周知も必要で、水質はこうでなければならない、というデータを科学者が調査分析して、ウェブ上で公表して、誰もがチェックできるようにしています。大都市に雨が降ったら、住宅や庭園、道路などから、川に有害物質が流れて来て、川の毒素が増加しますよね。そういったデータを公開する。その上で我々に何ができるか、あるいは市民に何ができるかを考えるわけです。ですから、規制当局との話し合いも必要になってきます。自然環境へのインパクトの少ない環境づくりをしましょうという提案をするにも、しっかりと説得力を持たなければいけないというところがポイントで、そこはまだ、我々にとってもチャレンジの部分だと思っています。

嘉名：パトリシアさんにも伺いたいのですが、パリの場合は、市長がアイデアマンで、それがスタートだったと思うんですけど、一方で、市民の方たちから、こんなの無理じゃないか、というような反対の声はなかったんですか?

パトリシア：私たちが、このプロジェクトを始める際、まず住民とのワークショップをしたんです。学生や若い人なども含めて、できるだけ色々な立場の人をそこに呼んで、これから河岸をどうしていきたいのか、という議論をして意見を聞きました。パリにおいては、プロジェクトを開発するには過半数の賛成がなければ、できないんです。このワークショップのプロセスを経て、過半数の人たちの賛成を得ることができました。もちろん、最終決定はパリの市長が行うわけですが、市長もパリの議会と話し合って進めなければいけません。それから、水質の話ですが、パリでもセーヌに有毒物質が入ってこないよう、流れてくる水の量をできるだけ少なくするための科学的な検証をし、対策をしています。たくさん課題がありますが、最終的にはセーヌで泳げるような水質にできればいいなと思っています。

忽那：サンアントニオのやり方も、パリのワークショップの手法もそうなんですが、市民が参加する、その力を使うというのを大切にされていますよね。それを大阪も続けていきながら、次は都市のビジョンのようなところに結びつけないといけないと思ってるんです。2020 年頃に大阪がどうなっているべきなのか、ということを市民が議論できる場をもっと作っていきたいですね。大阪は経済界や市、府が協力し合えるモデルを作っていますから、そういう明確なビジョンが必要になると思います。大阪全体が都市として、ミュージアムになるような、そういう街として世界に打ち出せる状況をつくれたりするといいなと思っています。

八木：今のところは、具体的にビジョンとか、目標とかは定義されているんでしょうか?

忽那：水と光の首都大阪とか、光と水をテーマにまちづくりをやっていくという構想はあるんですが、具体的にどう進めていくか、というプロセスがまだ見えない部分があります。大阪のまちの未来をどう描いていくのか、そのあたりのビジョンがしっかりあると、みんながワクワクするような、誇りをもてるまちづくりのイメージができてくるのかなと思っています。

佐井：いま、光と水の首都の話がありましたけれども、大阪では、光のまちづくりをずっとやってきました。これは大阪だけでなくて、関西全域で光で盛り上げようという活動で、私もこの活動に携わってきました。
やはり、光の都と言えばパリのイメージがあるのですが、夜の光の演出、夜のまちづくりについて、パトリシアさんに伺いたいのですが、夜の賑わいづくりについて何か意識はされていることはありますか?

パトリシア：パリでも、夜に開催するイベントはたくさんあります。例えば、先週末は「ニュイ・ブランシュ」というイベントがありました。毎年開催している一夜限りのイベントなんですが、毎年いろんなアートディレクターを招いてプログラムを企画してもらい、その夜は、たくさんの博物館、美術館で、アートプログラムを夜通しやっているんです。他にもアーティストが広場などの公共空間で制作をしたりするなど、オリジナリティのあるプログラムをたくさん展開しています。こういった夜のイベントを開催する際には、公共交通を提供するということも大事なことだと考えています。地下鉄などは夜通しやってるわけではないので、交通手段がない人たちは、歩いて移動しないといけなくなるんです。

スティーブン：光とそれを使ったパブリックスペースをどう生かすか、ということなんですが、やはり、夜間に橋などをライトアップすることが大切だと思っています。サンアントニオのリバーウォークもそうですが、橋が暗いと、近寄りたくないような雰囲気になります。だから、サンアントニオでは非営利団体に、民間から資金を集めてもらって、アート作品をその橋のたもとに置くことにしたんです。夜間になると、それをライトアップする。それがあることで、夜間でも安全で楽しめて、そこに行ったら何かできるというムードができて

います。また、クリスマスシーズンになると、サンアントニオでは、川沿いの木々や河川自体にもライトを当て、全体をライトアップします。そうすると、外に出て歩こう！という雰囲気ができます。ただその一方で環境への配慮の問題も必要です。より自然な生息域の回復を優先する地域には、ライトを置いていませんし、その区域には夜間は立ち入ることができません。野生生物の生息地としてふさわしい場所にするためには、常に光を当ててはいけないと考えています。どこにライトを当て、どこにライトアップをしないのかというのをきちんと考えるのも大切なことだと思います。

嘉名：ニラモンさんにも聞きたいのですが、チャオプラヤ川もクルーズが有名で、たくさん船が走っていますよね。川沿いの橋や、ワットのお寺などのライトアップは、誰がプロデュースしているんですか?

ニラモン：いや、実際の河川沿いは、実は暗いんです。先日タイの観光大臣をお連れしてチャオプラヤ川をボートで案内する機会があったのですが、暗くてまわりのものが見えない状態でした。国のモニュメントや記念碑的な建物、寺院などは美術省の管轄で、照明が当たっているんですが、それ以外は基本的には真っ暗で、そばに近寄れるような雰囲気ではないんです。観光はタイを変える重要な産業であるにもかかわらず、観光用のリソースがどんどん劣化している現状があります。これまではニーズに応えて、どうやって多くの人に来てもらうかばかりが優先されてきましたが、マスツーリズムだけではなく、これからは個人旅行、つまり体験型の観光が必要になると思います。観光客は、地元の人と同じように歩きたいのに、そんなに暗かったら、自分で自由に行動したいと思っても行動できない。まずはそういうところから変えていかないといけないと思っています。

嘉名：これからの話ですが、パリもサンアントニオもバンコクも大阪も、まさに今、オンゴーイングで動いてるということが特徴で、トライアルを続けているということなんですが、例えば10年後の 2025 年ぐらいの将来に向けては、どのような展望を持っていらっしゃいますか? もちろんオフィシャルなものだけではなく、皆さんの個人的な思いも含めて、少し次のステージの姿を語っていただけたらと思います。

スティーブン：今から10 年後ということですが、まず 3 年後の 2018 年には、サンアントニオでは、サンペトロクリークの 300 周年に向けた改修プロジェクトが完成します。その後は、まだ他に3つの支流がありますので、環境にも配慮しながら、その再生をしなくてはなりません。10 年後に向けては、小川の支流の再生もそうですが、グリーンウェイの整備をして、未舗装路をカバーしたいんです。人々がどこに行っても、レクリエーションを楽しめるような場所にすること。これを10年後には実現できればと思います。そして、かなり先の話になるとは思いますが。バクテリアの問題などが解決できれば、サンアントニオの川でみんなで一緒に泳ぎたいですね。これが我々の長期的な目標ですね。

ニラモン：バンコクでは、17 年後の 2032 年は首都成立 250 周年を迎える年にあたります。それに向けて、マスタープランを都市の中心部のインナーシティで実現していくための準備をしなければいけませんので、未来に向けて都市をどう育てていきたいのか、河川をどのようにしていきたいのかという計画が重要です。我々の控えめな夢ですが、今よりもっと質の良いパブリックスペースをジャンプリア川に作りたいと思っています。また、道路や鉄道なども導入して、人々が便利に通勤したり、街の中を行き来できるようになればいいなと思っています。現状リバーフロントや環境がだめになっているところから、人が離れているという状況があります。そういう場所を再生して、観光のポテンシャルも復活させなければなりませんし、そこで住み続けることができるようなコミュニティや環境づくりが必要だと思っています。

パトリシア：10 年先の未来に向けてということですが、やはりまず、パリが持続可能な首都として、これからも機能していくということが一つの目標です。それから、人々のモビリティーによる移動をもっと増やして、有害物質の発生を少なくしていくことも実現していきたいですね。今年は、国連の気候変動の会議がパリで開催されることになっていて、そこでは様々な環境問題についての話がテーマになりますから、それがまず第一歩ということになると思います。

忽那：やっぱり、大阪ってまちを使いこなすのが上手い人が多いと思うんです。そのまちを使いこなす人たちが結集して、10 年後には、誰もがいろんな使いこなしができるようにしたい。僕は、まちに住んでいる人がまちを使いこなして、自由に自分のライフスタイルを謳歌するというのは権利だと思っています。水辺から、街、道、公園だったり、いろんな所に広がって、さまざまな使いこなしが花咲く大阪になってほしいなと思っています。そしてそのためには、企業や行政が一緒に話し合いができるプラットフォームをつくることが必要だと思います。水辺の開発、あるいはイノベーションをしていくという時には、常に「水」に向かって、一緒にパートナーシップが組めるような関係づくりを実現して、水との繋がりで全てを語れるまちにしていきたいですね。水際から見た時に映り込む都市の姿、そしてそれを使いこなす人たちの自由な風景がパブリック空間に広がってること、それを実現するための投資なども含めて、支える仕組みをしっかりとつくっていきたいと思っています。

嘉名：私からは、各都市のお話を振り返って、まとめのお話をさせていただきたいと思います。まず、サンアントニオは、やはり水辺を使った地域再生に最初に取り組みを始めたこともあって、様々な成功をされていますが、それで終わっていないところがすごいなと思います。リバーウォークの真ん中からどんどん広げていって、水辺や川縁だけでなく、まちと一緒に広げていこうとされている。サンアントニオでは、アミーゴという人たちがいっぱいいて、とても親切に案内してくれたりする。街に水辺が欠かせないというか、街と水辺が一体になっているところが本当にすごいし、刺激を受けました。大阪も是非それを目指していきたいですよね。
バンコクのチャオプラヤ川は、今まさに現在進行形で、これからが本当に楽しみなんですが、私が印象に残っているのは、川にたくさんの船がある光景です。水辺を使うということに関しては、バンコクがナンバーワンだと思いますし、船もすごく日常的に使われている。そういう意味では、むしろ陸の方が、少しそのアクティビティを受け止めながら変わっていかないといけないというのがこれからの課題なのかなと思います。水辺だけではなく、水と街をどうつなぐかという、大きなテーマに挑戦されてるんだと思いました。これは大阪も同じ問題を抱えていると思います。
パリは、街を変えていくための「実験」っていうキーワードが、やはり一番印象的でした。観光も、市民のためのヒューマニゼーションもあるんだけども、まち自体を21世紀型にシフトさせていこうという大きな理念のもとにプログラムが組まれているっていうのが非常に興味深いと思いました。大阪でも 2020 年までに水辺を変えていこうというプログラムがあるんだけども、そこから先というのは、まだまだ我々がつくっていかなければならないと思いました。例えば、サンアントニオではエクステンションをやっていますが、大阪でも水の回廊を淀川からもっと広げていけるといいと思います。実は淀川というのは、京都にも瀬戸内海にもつながっている。サンアントニオも世界遺産に登録されたということですが、関西にも実はたくさんの世界遺産がありますよね。川を通じて世界遺産を巡るツーリズムのようなものを組み込むとか、もっと広がりを持たせていく可能性もあると思います。そして、どの都市でもワークショップやミーティングという話が出てきましたが、やはり色んな人たちとコミュニケーションをしていくことが大事だと思います。我々もそういう場をつくりながら、2025年あるいは 2030年くらいの近い将来に向けて、みんなで共有できる大阪のプランを是非つくっていきたいなと思いました。今日は本当に、たいへん刺激的な夜になったと思います。

八木：ありがとうございました。今一度パネリストの皆様に大きな拍手をお願い申し上げます。本日は、ありがとうございました。

DAY
2

ミズベワークショップ

Mizube Workshop

国内外のミズベに恋する
プレイヤー・プロデューサー達が大集結！
ミズベ愛あふれる水都大阪に学ぶ！

水辺を愛する国内外の活動家、有識者、事業者が集まり、チームに分かれてワークショップを開催。淀川に浮かぶ船上会場からの生中継も行いました。そして議論した内容を即興でまとめた「水辺アクションブック」を作成し、当日会場で配布しました。

Program

イントロダクション

オープニング／司会挨拶
ミズベラーズ紹介／船上会場紹介 ［ 忽那裕樹氏、山名清隆氏 ］
ゲスト登場 ［ 陣内秀信氏 ］
ワークショップ説明 ［ 忽那裕樹氏 ］／ Hiship 中継 ［ 奥谷崇氏 ］

ワークショップ

［セッション 1］見つける、伝える

ワークショップ・議論
発表［ ファシリテーター］ 講評［忽那裕樹氏、山名清隆氏、陣内秀信氏］
スポット意見交換［全員］

［セッション 2］設える

ワークショップ・議論
発表［ ファシリテーター］ 講評［忽那裕樹氏、山名清隆氏、陣内秀信氏］
スポット意見交換［全員］ 船上会場中継

［セッション 3］育てる、広げる

ワークショップ・議論
発表［ ファシリテーター］ 講評［忽那裕樹氏、山名清隆氏、陣内秀信氏］
スポット意見交換［全員］
【船上会場】発表／講評

まとめ

introduction

ミズベワークショップでの「見つける」「伝える」「設える」「育てる」「広げる」の各セッションの前に、大阪の水辺の魅力づくりに携わってきた活動家の方たちから、ディスカッションのイントロダクションとして、実践者から見たそれぞれの事例紹介と、セッションテーマのポイントについて、プレゼンテーションをおこなっていただきました。

セッション1 「見つける」「伝える」イントロダクション

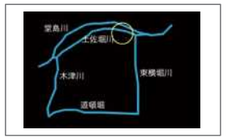
大阪の水辺を再発見し、その魅力をたくさんの人に波及させていく。

佐井秀樹
一般社団法人 水都大阪パートナーズプロデューサー

「見つける」「伝える」というテーマで、大阪がいかにして水辺の魅力をつくってきたのかということを簡単に振り返ってみたいと思います。まずは「見つける」ですが、古地図を見ると、かつての大阪は縦横に川が流れていました。そして今は、四角いロの字型の水路でつながっています。この川の魅力を引き出して、発揮していこうということで様々な取り組みがされてきました。

1つ目は、北浜テラスです。夜でも美しい中之島の風景を楽しめるように、川の上に床を張ったらどうかと、本来は床を張れない公共地に特例を得て、2008 年に実験開始しました。今はこれが、恒常的なものに変わり、11店舗が出店しています。2つ目の中之島ゲートは、川と海の結節点です。安治川を下ると、USJ から海に繋がる。この場所に、水都大阪パートナーズが 2013 年にラバーダックや、おおさかカンヴァス推進事業のアートを置きました。これによって多くの方の注目を集めるキッカケとなり、こんな夜景の見える美しい所があるんだ! ということが発信できました。その後、維新派が公演があったり、2015 年 2 月からは中之島漁港がオープンしました。生きたままの魚を全国から集めて販売し、そこで中之島のビル群を背景にしながら食事も楽しめる施設です。3つ目は、御来光カフェ。大阪の街なかは、高層ビルがあるので、なかなか山からの御来光が見ることは難しい。でも、土佐堀川を東に見ると、ビルがないので景色が抜けていて、その先に御来光を見ることができるんです。御来光を待ちながら、カフェを楽しむというものです。

つづいて「伝える」ですが、情報発信ということで言うと、水都大阪パートナーズがやっているのはプレスリリースの発行です。例えば、水都大阪フェスを開催します! ということがあれば、プレス用の説明会などを開催します。それによって、新聞に取り上げてもらったり、テレビで放送してもらえる。また、水都大阪などのイベントでは、市民の方に活動の発表の場として参加してもらったり、ワークショップに参加したグループと一緒に事業をやったりしています。そうすることで、参加する人がそれぞれ、こんなことやります! と SNS などで発信してくれて、そのクチコミからも情報が拡散していく。公式発表によって得られる「信頼」と「クチコミ」による組み合わせこそが、イベントへの興味・関心を広げることにつながっています。



セッション1 「見つける」「伝える」イントロダクション

関西随一の河川「淀川」を、大阪・関西の観光拠点としていくために。

杉本容子
株式会社ワイキューブラボ 代表

都心部の近くにありながら、広大な空間と豊かな自然に恵まれた関西随一の河川「淀川」を、市民の憩いの場、大阪・関西の観光拠点として活性化していくための実験事業として、ミズベリング淀川「淀川アーバンキャンプ 2015」を、2015 年 9 月に開催しました。「見つける」「伝える」のテーマと絡めて、その報告を簡単にさせていただきます。

まず、なぜ淀川でミズベリングなのかということですが、ことの始まりは、2014 年度から大阪商工会議所を中心に、淀川の賑わいづくりや観光活用について民間企業や有識者と議論する機会があり、そこで、十三大橋の将来像について、「世界に誇る水と光のエンターテイメントリゾート」として、日本屈指の都市型スポーツツーリズムの拠点にしたい! など、いろんな夢を語り合ったんです。それに向けて、まずは現実的な第一歩となる「ミズベリング 淀川」をやってみよう! ということになりました。会場は、十三の近くの淀川河川敷で、梅田の夜景がとても綺麗に見える場所なので、その風景を活かす企画を展開しました。昼のプログラムは、災害時でも使えるロケットストーブによる食のワークショップと、子どもでも参加可能な、花と緑によるテーブルコーディネイトを実施しました。昼の河岸では、メガサップ試乗や、企業と連携したモーターボード無料操縦体験会を開催しました。すると、普段は河原で寝そべっている人が、あまり使っていないテントを広げてやってみようか、という気持ちになったり、楽しみ方が伝わったという実感がありました。夜のプログラムは、キャンピングトーク。会議室ではなく現場で語ろう! ということで、土手を観客席にして、梅田の街の夜景を背景に淀川の将来像を語り合いました。夜の河岸では、ナイトクルーズも実施しました。陸と水辺、昼と夜を両方を楽しめるような装置やプログラムをつくったのですが、一番良かったのは、運営者や来訪者から「こんな場所が淀川にあったのを知らなかった!」「普段から使えるといいな!」という声が聞けたことです。河川空間活用の可能性や、淀川の新たな魅力を実感してもらう良い機会になったと思います。今日は日本中世界中の方が来られていますが、淀川って素敵なところだな! と思っていただけたら、ぜひ大阪に使いたおしに来てください。

セッション2 「設える」イントロダクション

水辺の拠点づくりから始めて、水辺を豊かな場所にしていく。

泉 英明
有限会社ハートビートプラン 代表取締役

「設える」ということで、大阪がこれまでどんな水辺をつくってきたのか、ということですが、大阪では 2001 年頃から、行政が中心となって水都大阪の取り組みが始まりましたが、まずは、八軒家浜や道頓堀川などのシンボリックな場所を再生することから始まりました。一方民間サイドでは、同じ頃に住之江区にあった造船所の跡地をアートの拠点に変える動きなどがありました。北浜テラスは地域のオーナー、NPO、店舗のみなさんで連携しながら、社会実験を1ヶ月間実施し、地元で管理できるような体制を作り、現在も運営しています。また、個性ある水辺拠点をつくろう!ということで、海から川に沿って、大阪城あたりまでを陸からも川からもアクセスできる水辺の川の駅のような、全部で17の 拠点つくろうとしています。それぞれ全部個性があって違うもの、そういう水辺の拠点が面白くなって、船で結ばれるようになればと考えています。中之島公園では、公園部分を行政から借りることで、水都大阪パートナーズの公募で選定した民間事業者が、飲食施設である中之島オープンテラスを開業しました。2014年は3ヶ月間、2015 年は 5ヶ月間に延長するなど、水辺のエリアマネジメントに向けた活動を展開しています。また道路占用によるグリーンマーケットも合わせて開催しています。また、大阪市役所の目の前にある中之島ラブセントラル、土佐堀川の中之島バンクス、社会実験中の大正リバービレッジ、従来拠点とも言える天保山ハーバービレッジなどは、陸側の民間事業者や地元協議会などがそれぞれの個性を活かしながら頑張っています。

また、イルミネーションも「設える」のうちの一つだと思います。OSAKA 光のルネサンスは、冬のイルミネーションイベントで、期間限定で御堂筋や橋梁、阪神高速、常設の民間企業なども会場としています。

セッション3 「育てる」「広げる」イントロダクション

人のつながりや整備のプロセス、それらを支える仕組みが大切。

泉 英明
有限会社ハートビートプラン 代表取締役

「育てる」のテーマでは、水都大阪 2009 についてお話します。水辺でこんなことがしたい! という想いのもと、ほとんど使われてこなかった川沿い空間の中之島公園をメインの場所として、2009年にはじまりました。

そのなかで、様々なネットワークが生まれ、担い手同士が繋がり、新しいプロジェクトが生まれたりしました。またイベントを通じて育てられた、プレイヤーを応援する「サポーター」や、伝えたい想いを活動にした「レポーター」も大活躍でした。

つづいて、中之島GATEです。これは、育てる広げる、のプロセスを踏んで展開する事例の一つです。対象地はUSJの手前、都心部からも港湾部からの外れた臨港地区で、人も行かないような場所です。開発の芽もない場所を、いきなり開発をするのではなく、イルミネーションや、アートを使って、エリアのポテンシャルをPRしました。その後企業の方に興味を持っていただいて出店につなげるというプロセスです。2012 年から 2 年間、様々な取り組みを展開し、2015 年に中之島漁港として開業しました。

「広げる」ですが、水辺の使いこなしを広げる際、そこには既得権などの問題もあるなか、大阪では様々な方が先進的に数十年前から取組んで来られて、ちゃんと使える仕組みができています。大阪シティクルーズ推進協議会は、2009年頃にできた舟運事業者、観光事業者、メディア関係者による協議会です。NPO法人大阪水上安全協会は、河川水上交通の安全を統括管理、調整している民間組織です。官民推進体制としては、一般社団法人水都大阪パートナーズという推進の民間と、水都大阪オーソリティーという統括の行政窓口の両輪が挙げられます。

セッション3 「育てる」「広げる」イントロダクション

川と人、人と人を結び、次世代の「川の守り人」を育てる。

小林慧人
淀川管内グループ河川レンジャー

私は、淀川河川レンジャーとして木津川で活動を始めて2年目になりますが、河川レンジャーとして活動してきたことについて、少しお話をさせていただきます。淀川河川レンジャーには、川と人、人と人を結ぶんだ! という思いを持って活動に取り組むの人たちがたくさんいます。僕もその一人で、長年活動をされてきたおじいさんたちにも色々教えてもらいながら、グループで活動に取り組んでいます。

木津川は、淀川水系に流れている一級河川で、砂河川が特徴的です。天井川も流れ込みます。2年前に活動を始める時、木津川の課題として、川遊びをしている子どもが少ないという点が浮かび上がったので、活動目標は、若者と川で原体験を積もう! としています。

自分たちのモットーは、自然を楽しむだけじゃなくて、学べること。そういう活動を企画して取り組んできました。例えば、川の中での魚採りや、100人を超える大人数での活動、今問題になっている外来生物についての検討会、また時にはアートと結びつけたイベントの開催や、珍しい生き物を守る活動など、様々な活動をおこなっています。参加者の対象は小学生が中心です。小学生は、自分たちを憧れの存在として見てくれています。大学になっても、魚の研究をしたい! と言ってくれる小学生もいます。自分たちの活動は、次世代の「川の守り人」を育てていると思います。これを行政がバックアップしてくれています。「広がり」の面では、様々なメディアにいろんなカタチで取り上げていただいています。近畿から広がって、全国にも広がりつつあります。そして今日、このようにして世界まで広がることができたことを嬉しく思っています。

workshop

ミズベワークショップでは、水辺を愛する国内外の活動家、有識者、事業者のみなさんに集まっていただき、5つのテーブルに分かれ、「見つける」「伝える」「設える」「育てる」「広げる」のテーマのもと、同時進行でワークショップをおこないました。

Table 1 ミズベリング○○会議チーム

［テーブル配席］

● ファシリテイター
泉 英明　有限会社ハートビートプラン 代表取締役

ミズベリング○○会議 国内プレイヤー
黒沼尚史　ミズベリング富士川・笛吹川会議

ミズベリング○○会議 国内プレイヤー
牟田弘幸　ミズベリング熊本白川会議

ミズベリング○○会議 国内プレイヤー
坪田哲司　ミズベリング二子玉川未来会議

ミズベリング○○会議 国内プレイヤー
平山広孝　ミズベリング岩原川会議

関西・光のまちづくり
中西康博　関西・光のまちづくり から 奈良県知事公室審議官

在阪水辺関係者
松本 拓　北浜水辺協議会理事

Table 2 全国水都ネットワークチーム

［テーブル配席］

● ファシリテイター
高梨日出夫　一般社団法人水都大阪パートナーズ 代表理事

全国水都ネットワーク国内プレイヤー
新居 直　特定非営利法人 新町川を守る会 副理事長

全国水都ネットワーク国内プレイヤー
山﨑 学　NPO 法人 雁木組 理事

全国水都ネットワーク国内プレイヤー
栗原道平　信濃川ウォーターシャトル株式会社 代表取締役社長

全国水都ネットワーク国内プレイヤー
篠生政士　日本橋地域ルネッサンス 100 年計画委員会 事務局次長

全国水都ネットワーク国内プレイヤー
竹内治彦　岐阜経済大学 副学長

在阪水辺関係者
原 健二　淀川管内河川レンジャー（高槻出張所管内）

在阪水辺関係者
玉置泰紀　株式会社 KADOKAWA ウォーカー総編集長

Table 3 世界河川プロモーション会議チーム

［テーブル配席］

● ファシリテイター
佐井秀樹　一般社団法人水都大阪パートナーズ プロデューサー

在阪水辺関係者
杉本容子　株式会社ワイキューラボ 代表

在阪水辺関係者
野口 隆　近畿地方整備局 河川部 広域水管理官

編集者視点
長瀬正明　東京ウォーカー 編集長

編集者視点
古川 誠　オズマガジン 編集長

編集者視点
田尾圭一郎
『美術手帖』編集部／アートニュースサイト「bitecho」プロデューサー

編集者視点
泉友果子　タイムアウト東京 副編集長

Table 4 ミズベインターナショナルチーム

［テーブル配席］

● ファシリテイター
福岡孝則　神戸大学大学院 工学研究科 特命准教授

海外パネリスト
スティーブン・シャウアー　サンアントニオ リバー オーソリティー

海外パネリスト
ニラモン・クンスリソムバット
チュラロンコン大学 建築学部 地域都市計画学科 准教授

スペシャルパネリスト
木下 光　関西大学 環境都市工学部 建築学科 准教授

海外編集者
アピポーン・ワチャラシン　雑誌「イメージ」エディトリアルスタッフ

スペシャルパネリスト
前田茂樹　大阪工業大学 工学部 建築学科 准教授

海外パネリスト
パトリシア・ペルー　パリ市都市計画アトリエ

Table 5 船上会場チーム

［テーブル配席］

● ファシリテイター
森なおみ　株式会社インプリージョン

船上会場枠
大江幸路　水上バス株式会社 大阪シティクルーズ推進協議会 事務局長

船上会場枠
武田重昭　大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 助教

船上会場枠
中村裕子　大阪商工会議所 地域振興部 課長

船上会場枠
伏見たかし　枚方市市長

船上会場枠
梅田和夫　淀川河川事務所 所長

船上会場枠
一本松英三　一本松海運株式会社／NPO 法人 大阪水上安全協会理事

※ 船上会場チームは、テーブルを「巡視船 かわかぜ」の船上に移して、会場と生中継でつなぎながら、ディスカッションをおこないました。

メインテーブルのディレクションのもと、お好きなテーブルのトークを視聴していただきました。

今回、ミズベリング世界会議では、赤外線同時通訳レシーバーによる視聴システムを導入しました。2日目のミズベワークショップでは、5つのテーブルで同時にディスカッションがおこなわれましたが、視聴者の方には、レシーバーとイヤホンを配布し、各テーブルに設定されたチャンネルを自由に合わせて、視聴していただきました。

「世界河川プロモーション会議」について

助成：公益財団法人 河川財団

「ミズベリング世界会議」に合わせ、国内外の雑誌、新聞等の編集者（記者）を大阪に招致し、日本と世界の河川事例や課題を共有しつつ、その魅力を各メディアに広く発信していただくことを目的として開催しました。当日は、世界初の電気旅客船「あまのかわ」に乗船し、大阪市の中心に位置する中之島エリアの湊町船着場→道頓堀川→ほたるまち港をめぐり、水辺の魅力についてディスカッションをおこないました。

Session 1 見つける 伝える

［ミズベリング○○会議チーム］

「大学生による観光まちづくりコンテントの開催」大学生に全国から集まってもらい、外から来た人の目線で、地域の魅力を発見してもらう ／「小学生を巻き込んだ、対岸と仲良しになる船づくりアクション」対岸の同地名に気付いた小学生による、区長を巻き込んだ自家製渡し舟によるイベントを開催／「キーマン発掘が最重要」地域や行政にキーマンを見つける。民間・学校・地域社会をつなぐ役割。また行政マンによる初動期の予算取りも大事 ／「SNS による、発信者周辺の人たちへの派生を大事に」SNS や HP、ブログでの発信の際、関わってる人が更に周りの人と繋がってるため、そこからさらに派生しやすい状況が効果的／「メディア掲載も大事だが実践・実験・体験でプレ発信」メディアに紹介されることも大切だが、事後になりがち。実践・実験・体験してもらい、彼らに発信してもらうことも効果あり／「小さな活動たちを束にして発信」一個一個の小さな活動を束にできれば、魅力的な絵姿に見えて、発信もしやすい！

［全国水都ネットワークチーム］

「水都のかつての名残りである雁木（がんぎ）を船着場として活用」当初舟運をやりたかったが、桟橋を作ったりするのに予算がかかるため、なかなか上手くいかなかったが、街のいたる所にある、かつて荷物の上げ下ろしをしていた「雁木」という水辺に降りる階段を船着場として活用するとこから活動が動きだした／「自分たちで汚した川は、自分たちで掃除しよう！」自分たちの汚した川は、自分たちで掃除しようということで会をスタートさせた／「橋からはじまる、江戸時代に発達した水運の歴史探索」水辺を生かしたまちづくりを行うべく、歴史ある橋を中心に、江戸時代に発達した水運の隆盛を探索。これを資源としつつ、まちづくりにつなげたい!／「行政と市民の橋渡し役である河川レンジャー」河川レンジャーは、色んなイベントや調査を通じて、地域住民の方々からの意見を吸い上げ、川の課題や将来ヴィジョンを、川をよくしていくために、行政とともに考えていくコーディネーターのような位置付けとして活動している。

［世界河川プロモーション会議チーム］

「まずは自らたたずんでみる」とにかくビール片手に、ぼーっとすることから始めて、何が一番気持ちいいかを自分が体感的に発見してみる／「現場で見つける」まちに出てもらうために、素敵なレストランやカフェなどを探して紹介するメディアとしては、「見つける」というのは、やはり命。外国の方からも、水辺のレストランやカフェはすごく人気がある／「情報との接点を増やす」近年紙媒体の接触頻度が落ちているなかで、それをさらにウェブに出す際、紙面でできなかったレポートを追記したり、電子書籍にもする。その場所が魅力的に見えるきれいな写真もとても大事／「ほかとは異なる魅力を伝えよう」大阪の水辺に行こう!だけでは、なかなか伝わらない。例えば、デートに誘う時、どういう誘い方をしたら来てくれるか? という考え方をしてみる。また大阪の水辺はここがこう違う! という伝え方で、人を誘い込みたい／「時には強引なフレーズを」上流から情報を流す時は、ちょっとした強引さも必要。大阪のノリをそこに入れ込むのも、すごく面白い。

［ミズベインターナショナルチーム］

「水上で取り組みやすく、眺めていても楽しいプログラム」パリでは、水上を使いこなす運河でのカヌーから取組みが始まった。6人乗りのレンタルボートはピクニック気分になれる!／「ライトアップと美味しい屋台と素敵な音楽を」バンコク、チャオプラヤ川は多くの船が行き来しており、水質の関係もあり泳ぐのは難しい。最初は川辺で静かにゆっくり過ごせる小さなイベントを企画する。それは将来のプランニングも踏まえたカタチとする。夜のライトアップ照明と美味しい屋台と素敵な音楽も重要／「多種多様なイベントが観光客をもてなす」サンアントニオでは、休日のパレードからネイチャーウォーク、ラッキーダックレース（5ドル／回で参加、寄付へ）まで、地味なものからお祭りまで多種多様なイベントを平日・休日問わず打ち続けている／「様々な場所でパフォーマンスが展開できる状況を生み出したい」時には船の中、船の外でパフォーマンスをする。橋の上でパフォーマンスをするのも面白い。はたまた電車の中でパフォーマンスが行われている状況も面白い。

［船上会場チーム］

「舟運は、船上イベントだけでなく、陸上のプログラムとセットで考える」集客をするために、船の中でご飯を食べるとか、コンサートをするとか、いつも船のことしか考えていなかったが、乗り場の近くの飲食店とつなげてみたり、なるべく陸上側の人とコミュニケーションをはかりながら、いろんな形で利用者を増やしていかないと、今以上に利用者は増えていかないのではないか／「大阪シティークルーズ協議会（OCC)」大阪には市内の舟運を盛り上げていくための舟運事業者達による協議会がある／「いい場所、いい雰囲気のポテンシャルを見つけるところから水辺は変わる」そこに行きたくなるようなポテンシャル持った場所を見つけるところから、今の水都の流れが変わってきていると思う／「行政の中に、本気で水辺を活性化しようとしてる人を見つけることが大事」舟運事業者としては、国・府・市でも、行政の中に本気で水辺を活性化させようとしている人を見つけることが大事になる。

「見つける」「伝える」セッション まとめ

場所のことだけではなくて、行政の中にキーマンを「見つける」ことだったり、若い人や学生が参加すると、地域でやっている活動が活性化していくという話だったり、人にスポットを当てたアイデアが出ていたのが、非常に面白いなと思いました。舟運の話も出ていましたが、昔は東京も、川の河口のあたりは船でいっぱいだった。昔の浮世絵や名所図会を見ても、川から見た風景というのがとても多い。橋のデザインなども、船からの視点を最も意識してつくっていたんです。船から見る風景というのもとても大切なことですね。渡船の話も出ていましたが、船の中でイベントをするのももちろんいいですが、その川で行われるイベントを岸辺から見たり、見る・見られるという関係をつくることも重要だと思います。（ 陣内秀信氏 ）

Session 2 設える

[ミズベリング○○会議チーム]

「イルミネーションによる場づくり」明るくし過ぎず、暗闇を活かしたイルミネーションが大事。月明りや水辺への映り込みは効果的に活用すべき／「元々ある風景を徹底的に活かした愛着ある整備」元あった景観を復元し、そこを歩いたり過ごしたりできる設えを用意する。樹木の移植や伝統工法を踏まえることも大事／「小さく産んで、大きく育てる」いきなり大きなスケールで設えると、ハードルが高くなり時間もかかる。自分のスケール感覚に近いところで、最終目標はちゃんとイメージしつつ、徐々にそのスケールを広げていくプロセスが重要／「使われることをイメージして設える」ちゃんと使われることをイメージして設えよう!／「とにかくまずは最短距離で設えてみる」いかに最短距離で設えて、体験できるかが大事。それが「伝える」や「見つける」にも利いてくる／「水辺の自由、どこまで自由か試してみる」どこまで水辺を使いこなせるかを逆引きでトライしてみるのも良い。そしてそこから行政の方々と勉強会などを開催し、互いに理解を深めていく。

[全国水都ネットワークチーム]

「回遊性、親水性、そして水質をいかに上げるかがポイント」将来構想のイメージを描きつつ、後ろに向いている建物を川側へ向きなおす方策が重要。雨が降ると水質も悪くなるので、水門操作や浚渫も踏まえつつ、改善を図りたい。そして船が運休してしまう状況を打破したい／「地域の自慢の橋を眺められる恒常的な施設を設置」国指定の重要文化財にも指定されている橋がある。かつてはビアホールとかウォーターフロントレストランがあったけれど、なぜかみんな撤退してしまった。橋を眺めてくつろげる場所、特に飲食ができる恒常的な施設が必要。また既設の照明やサインなども統一感を持たせたデザインが必要／「世界遺産を巡る舟運」もともとそこにあるものをシンボルとして設えた観光ルートの設定／「地域で浚渫祭りを開催」かつて地域で行われていた浚渫（しゅんせつ）はなかなか重労働。近年スクリーンを組み立てた野外上映会などと合わせて、お祭りに仕立てた。新たに設えるというよりも今あるものを活かしつつ、つむいでいくことが大事。

[世界河川プロモーション会議チーム]

「水辺ランチを開催」まだ中之島公園が、今のようには過ごしにくかった頃、みんなで集まればこわくない!と、近くで働いている人たちでお弁当を持って集まるというイベントを開催した。いざ水辺でお弁当食べるととても気持ちいいので、美味しいコーヒーが飲みたくなる。そこにコーヒーを売る人が来る、次はシフォンケーキ…などなど次々に集まった。行政が聞くとびっくりするようなことだが、ゲリラ活動としてやっていた／「インフラが使いこなしを促進」トイレがあると、その場所を使いこなしやすい! その場所ならではのカッコいいインフラを!／「水辺を変える、は手段」水辺を変える、となると分かりづらい。水辺を変えるのは手段で、その目的を、時間や、そこに集まる人たちの笑顔とかに変えると、ホスピタリティが出てくる／「そぎ落とすという発想」整備中心の考え方では、どんどん強い敵が必要になるドラゴンボール理論のように、次々更新が必要になる。そうではなく、今あるものや過去にあった歴史性、場所性の本質を見て、いらないものをそぎ落としていく。

[ミズベインターナショナルチーム]

「市民の声がどのフェーズでも反映されるカタチが重要」リバーウォークの始まりはワークショップによる市民の声。それをもとにマスタープランを作成し、コンセプトをみんなで共有している。設計する際は、建築家やランドスケープアーキテクトなど専門家にそのコンセプトをその都度検証してもらうカタチで進めている／「文化的な遺産をライトアップすると多方面に良い話題として広がりやすい」バンコクでは、文化的な遺産のライトアップを行った。地元住民にも好評を得やすく、フォトジェニックなため、テレビ局も大きく取り上げてくれやすい／「好きな場所に移動できるデッキチェア」自分の好みの位置に移動できるデッキチェアやファニチャーは好評。たくさん座れる場所を作る、すなわち市民への「サービス」にお金をかける工夫をしている／「はじめは社会実験、そして期間を延ばしていって本設へ」パリでは、いくつもの社会実験を開催するが、実験期間を延ばしながら、最終的に本設になるような進め方をしている。

[船上会場チーム]

「活性化したら、その時には新たなルールが必要」今後、川が活性化して、それが普通の日常景観になると、次は今とは異なるルールが必要になる／「水辺で一番いいのは、安いこと」お金をそれほどかけなくても、のんびり一日佇むことができる／「枚方水上マラソン」枚方の三川合流地点から枚方まで、健康をかねたサップやカヌーなどによるマラソン。毛馬まで行くコースなど、いろんなコース設定も展開／「大阪はナイトクルーズが大好評」ナイトクルーズで何が一番ウケてるかというと、整備が進んだ夜景の綺麗さ!／「伏見～枚方～八軒家浜!」淀川はかつて伏見まで三十石船が行き来していた。伏見まで行けるとロマンが繋がる。物語ができるような、そんな気がする!／「緊急河川敷道路はサイクリングコースに」淀川の河川敷は「緊急河川敷道路」と言って、地震時に街中の道路が使えない時、物資の輸送ができるよう、京都までずっと繋がっている。サイクル貸出返却ポートがあれば、デートで来たカップルも、どこでも乗り捨てできる。

「設える」セッション まとめ

「設える」というテーマでしたが、新しく何かをつくっていくという話ばかりではなくて、むしろその場所の本来の固有の価値を尊重して、最後にはそぎ落としていくという話まで出ていたのが非常に印象深かったです。日本橋や新潟の万代橋の話なども出ていましたが、それぞれの地域にあるシンボリックな橋などの文化財の価値をみんなで共有していく。つまり今あるものを大切にしながら、それにふさわしい演出をしていくということですね。またパリでも、新しく何かをつくるというより、市民がほしいものをつくるという方向にシフトしてきているというお話で「サービス」というキーワードも出ていました。そこにしかないものを「見つけて」、「設える」ということがつながって、とても面白いワークショップになったと思います。（ 陣内秀信氏 ）

Session 3 育てる 広げる

[ミズベリング○○会議チーム]

「水辺に誇りを持てる取り組みを育てる」自分たちの水辺という誇りを持ち、それを育てていきたい／「キーマンからキーマンへ、世代を越えて意思を共有する難しさ」キーマンは重要だが、世代を越えて意志を継承する難しさは、絶対に覚悟しておかなければいけない／「上流と下流が向き合う重要性」上流と下流は水質に重きを置きつつ、上流の小さな農村と下流の大きなまちとを繋いで考えていく必要がある／「水源涵養林による交流」首都圏での水道料金上乗せによる水源涵養林の保全など、流域に生活している人たち同士が相互に理解・交流・活動することが必要／「流域で生産された食べもので水辺 BBQ・流域内レストラン事業」流域で採れた魚や野菜、米などをワンプレートにして提供。例えば水辺のバーベキューやレストランも面白い／「水鳥が教えてくれる行政区境を越えた観光保全」大型の水鳥は行政区境に関係なく飛んで行く。彼らのための自然環境をちゃんと作るためには行政区境で話をしていてはダメ。

[全国水都ネットワークチーム]

「川の使いこなしと防災視点を」ミズベリングでは、川に親しんで新しいまちのあり方をみんなで考えるが、防災的な視点をうまく組み込んでいくことも大事／「川の清掃活動は上流から下流まで協力」市内の河川は、地元の小中学生ぐらいまでの青年団体が清掃などを行い、美しくなってきたが、上流からゴミが来てしまうため、より広く美化アピールする必要がある／「まずは清掃活動から」何をやるにもまずはじめは清掃活動から。小・中学校、企業、それから官庁、初任者研修や課外活動など、団体で来てくれる／「未来に繋げるためには、若い人を入れていくこと」視野を広げて、若い人から見た視点と、小さい子どもたちにいかにファンになってもらうかということが大事／「ミズベリングを、東京五輪の時に全国で展開される文化事業の目玉に!」防災を踏まえた遠い将来のことも重要だが、2020年東京オリンピックはイメージしやすい目標。その時に、いま各地域でやられてるようなミズベリングの動きをアピールすることは、大変意義がある。

[世界河川プロモーション会議チーム]

「水都大阪メディアジャック」今回出席している4つのメディアを、5000万円くらいで買ってもらい、4メディアが同じ日に「水都大阪」の切り口で、いっせいに雑誌を発行する。さらにそれを継続させると世の中的に見ると「何でこの4誌がやってるの?」と、必ずなる。また各エリアの特徴を各雑誌の特徴と重ね合わせた発信や、ツアーと連動した企画があると面白い／「育てる、想いを受け渡す」関係性を醸成するなかで、行政では人事異動があるため難しい。地方創生と言われているが、そこが突破できない壁になる。しかし市民や民間がベースを張り続けたり、行政の中にもパーソナリティで生きていける方がいるので、そういう人を発掘して欲しい／「市民と行政の密な対話」水都大阪に仕事として関わりはじめてから、行政の方とお話する機会が多い。市民の方はこう使いたい、といろいろ意見を言うが、行政へはそれを翻訳しないと伝わらない場合がある。そのおかげで、行政語や地域語をたくさん話せるようになった。市民も行政も密な対話が大切。

[ミズベインターナショナルチーム]

「ワークショップは、想いの抽出と共有の基本」パリでも、学生や地域住民を招いてのワークショップを開催し、まちづくりにつなげる取り組みをおこなっている／「持続可能な開発を、様々な専門家と分業しつつ展開」サンアントニオは、河川整備を下流の南部エリアに拡大していっている。レクリエーション・コミュニケーション・エコロジカルなリサーチ、緊急時対応などを踏まえつつ、経済発展をとげるために、様々な協働を進めている／「受益者負担でまちの保全や魅力づくりが可能になるPID」サンアントニオでは、1999年から実践しているPID制度（パブリック・インプルーブメント・ディストリクト）がある。この制度は一定区域内の不動産所有者に税金とは別で、区域内の景観保全や魅力創造のための分担金を徴収できる仕組みとなっている／「活動を広げるときも SNS が大活躍」バンコクでは、マスタープランを作成する際、フェイスブックのフォロワーが3か月で4万人以上に増加した。

[船上会場チーム]

「水辺での自己責任、もっと育てたい」行き過ぎた安全性が水辺を遠ざけている。自分で自分を守る重要性を感じてもらう必要がある ／「こんなことがあったら面白い！とか、こんなことをやりたい！という“思い”から始まる」まずはその場所を使いたい! という思いがあって、次に、じゃあ現状使えないならどうしたらいいのか、みんなで使うにはルールや仕組みを整備しないといけない、という話になる。そうした声や思いを拾って、いかにビジネスにつなげていけるかが重要 ／「ビジネスにしないと長続きせず、広がらない」河川敷を使うバーベキューなども、結局のところ、お金が儲かることにつながらないと長続きしない ／「舟運を広げる」淀川大堰に閘門ができると、大阪湾から上流の伏見まで船で行くような可能性が広がってくる。そうなれば、観光舟運の新しいルートも広がり、災害時の物資輸送などにも使われていくのではないか／「船版ななつ星」大阪湾から京都まで、超豪華列車「ななつ星」の船バージョンのような船で、江戸時代の舟運を今の時代に再現する！

「育てる」「広げる」セッション まとめ

「まちづくり」という言葉は、ハードとソフトの両面の意味がありますが、実は、これは欧米の言葉には訳せないんですね。行政がマスタープランやグランドビジョンを描いていくというハード面はもちろん重要だけれども、市民や NPO がそこに参加することや、そういった様々な立場の人をつないで可能性を引き出していくというソフト面もことも同時に進めないといけないということですね。また、日本ではウォーターフロントというと、これまではアメリカやヨーロッパの先進事例ばかりを見てきたけれども、今回はバンコクがクローズアップされましたが、アジアの事例も本当に重要になってきていることが実感できました。これからは、この世界の水辺をつないでいくような、新しい取り組みが生まれてくると面白いなと思います。（ 陣内秀信氏 ）

水辺アクションブック　Mizube Action Book

トップミズベラーたちのアイデアをここに集約!!

２日目「ミズベワークショップ」での、国内外から集まったトップミズベラーによるディスカッションの中から、水辺の魅力アップにつながるアイデアを「見つける」「伝える」「設える」「育てる」「広げる」の５つのテーマのもとに集約しました。

見つける

Mizube Workshop Session 1

水辺の小さな発見が様々なアクションのはじまりだ。いずれの水辺再生にもきっかけをつくったドラマチックな発見がある。水辺の魅力は、待っていても見つからない。積極的な行動が水辺の潜在的な魅力を教えてくれるのだ。

キーマンになる人を見つける
- 情報を集約する人
- 大学生や小学生などの若い世代
- 地元で継続的に伝える人

課題を見つける
- 川の環境についての課題
- 歴史の発見
- 新しい船をどう動かすか

非日常を見つける
- 船上から見るパフォーマー
- 50 ユーロ ラバーダックレース

IDEA

いい場所、いい雰囲気のポテンシャルを見つけるところから水辺は変わる／舟運は船上イベントだけでなく、陸上のプログラムとセットで／行政の中に本気で水辺を活性化しようとしてる人を見つけることが大事／気持ち良い水辺を見つけることからはじまるライフスタイル／外の人に見つけてもらう／現場で見つけるってとても大事／橋からはじまる江戸時代に発達した水運の歴史探索

伝える

Mizube Workshop Session 1

水辺の魅力やそこでの出来事をいかに都市に波及させていくかは、アクションの成果を大きく左右する。伝えるコンテンツは情報だけではない。ムードや物語、その都市が目指そうとするビジョンなど、水辺の持つ魅力そのものを多様な手段でデリバリーすることが必要だ。

自分ごとにして伝える
- 商売につなげる
- イベントで伝える
- 体験につなげる

外からの視点を意識する
- きれいな写真
- 水辺に特化した飲食
- 読者の意見を取り入れる

ターゲットに届く方法で伝える
- SNS による発信者周辺への派生
- 活動新聞や回覧板は非ネット民に効果的
- 情報との接点を増やすことを意識する

IDEA

メディア掲載も大事だが実践・実験・体験でプレ発信／プロポーズできる、キスできる!? 欲望に訴える告知／体感できる場所に連れていくことが一番伝わる／日本一と飲食は、やはり効果的／時には強引なフレーズを／問題提起型の手法もあり／紙媒体だけでなく SNS で認知度 UP ／プレスリリースはメディアがネタに困るときに／読者でない層にどうやって情報を届けるか?

設える

Mizube Workshop Session 2

人が使うことで、水辺に新たな魅力が生まれる。日常的な水辺の使いこなしや、非日常的な水辺でのイベントなどを通じて、人が居ることができる水辺を設えることは欠かせないアプローチだ。水辺のポテンシャルを丁寧に読み取り、効果的なデザインをすることで、そこは都市で最も豊かな場所になるはずだ。

気持よくたたずめる工夫
- 堤防をスタンド席に
- インフラが使いこなしを促進

引き算の設え
- 場所の本質を見きわめ、余計なものをそぎ落とす発想も必要

今あるものを活かした設え
- 元ある風景を活かした整備
- 地域で浚渫祭りを開催

IDEA

今あるものでたのしむ、今いる人とつくる／住む人のための空間か、観光客のための空間か、コンセプトが必要／水辺に近づくためのしかけ／水質改善に寄与する設え／そこだけにある風景を壊さない／市民参加でハード整備を決め、行政がまとめる／社会実験を長くして、知らないうちに本設

育てる

Mizube Workshop Session 3

水辺へのアクションには多様な主体の連携や協働が不可欠だ。そのためには、共通の想いを育てていくことが求められる。強いリーダーシップではなく、共感をデザインすることで、誰にでも開かれた水辺の仕組みが育まれている。人が水辺を育み、水辺が人を育む関係は魅力的だ。

キーマンの育成
- 子どもにファンになってもらう
- まずは清掃活動からはじめる

世代を超えた課題の共有
- 世代を越えて意志を継承
- 行政頼りにしない

継続的できるアクションを育てる
- 水辺に誇りを持てる取り組み
- 多様な専門家と分業して展開

IDEA

一つのエリアのキーマン育成だけでなく、広域的にとらえる／こどもに水辺の状況を知ってもらう／メカニズムを知って川を楽しむ／地域の財産をつなぐ／まちの資源ストックを活かす戦略／エリアマネジメントの仕組みで稼いだお金を川のために／枚方SUPマラソンの実施／川の中のサイクリングロード

広げる

Mizube Workshop Session 3

動きのない水面に一石を投じて波紋を起こすことも重要だが、アクションの成果を確実に都市へ広げていくための戦略を持つことも欠かせない。制度の壁を越えるチャレンジや、持続可能なマネジメントの仕組みを計画して経営していくことが求められる。

多世代が参画しやすい状況
- ワークショップで想いを共有
- 水源涵養林による交流

既存の仕組みを使った発信
- 一斉にメディアジャックする
- 活動を広げるときも SNS が活躍

経営的視点が重要
- サンアントニオの PID 制度
- 地産地消で水辺 BBQ

IDEA

10 歳くらい下の人に伝えるのが効果的／町内会の仕組みを使って広げる／未来につないでいくべきものをみんなで考える／メディアジャック／一斉に水辺の特集を組む／定期的な情報発信／たくさんのプランを提案しまくる／コミュニケーションスペシャリスト（メディアなどを巻き込む）

DAY 3

ミズベ未来アクション

Mizube Future Action

次世代が思い描くミズベの未来のために、我々は何をすべきか、バトルトークで決着！関西７大学の学生による水辺への提案も！

水辺都市の再生、観光まちづくりの専門家である橋爪紳也氏の基調講演をきっかけに、豪華パネリストたちが、それぞれの立場で考える水辺の将来像をぶつけ合うバトルトークを展開しました。
また午前中には、関西7大学の学生による、「水」「アーバンデザイン」「エリアマネジメント」を意識した水辺への提案も発表され、豪華講師陣による講評や表彰もおこないました。

Program

［第１部］
大学連携・学生発表

参加大学：
大阪工業大学、大阪市立大学、大阪府立大学、
関西大学、京都大学、神戸大学、立命館大学

［第２部］

オープニング ［ 忽那裕樹氏 ］

基調講演 ［ 橋爪紳也氏 ］

学生発表　２作品の発表
まとめ　［ 木下光氏、堀口徹氏、前田茂樹氏 ］

バトルトーク

開会挨拶、登壇者紹介　［ 忽那裕樹氏、山名清隆氏 ］

各賞授与　［ 山田邦博氏、嘉名光市氏、伊藤香織氏 ］

閉会挨拶　［ 山田邦博氏、忽那裕樹氏 ］

大学連携・学生発表

関西を中心とした建築・都市系大学の学生達が、「水」・「アーバンデザイン」・「エリアマネジメント」のテーマを共有、様々な対象地を設定し、未来のミズベのあり方をダイナミックに提案。それらを有名建築家や大学講師陣が一気に講評していただきました。

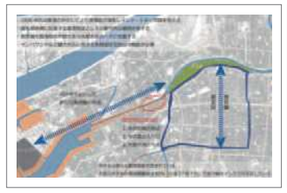
【ゲスト講評者】伊藤香織（東京理科大学 理工学部 建築学科 教授）

【講評者】嘉名光市（大阪市立大学大学院 工学研究科 都市系専攻 准教授）／武田重昭（大阪府立大学 生命環境科学研究科 緑地環境科学専攻 助教）／木下光（関西大学 環境都市工学部 建築学科 准教授）／久保田善明（京都大学大学院 工学研究科社会基盤工学専攻 准教授）／福岡孝則（神戸大学大学院 工学研究科 特命准教授）／ Niramon Kulsrisombat（チュラロンコン大学 建築学部 地域都市計画学科 准教授）／黒川純一良（国土交通省近畿地方整備局河川部長）

【進行】前田茂樹（大阪工業大学 工学部 建築学科 准教授）／堀口徹（立命館大学 理工学部 建築都市デザイン学科 准教授）

【参加大学】大阪工業大学、大阪市立大学、大阪府立大学、関西大学、京都大学、神戸大学、立命館大学

最優秀賞 「アジガワスタイル」 大阪府立大学　松浦由布子・村尾駿・蒋雅瓊・宮本祥之



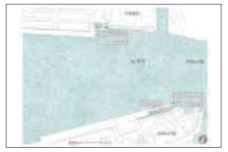
安治川のこの場所は、川側のコンクリートでできた高い直立の特殊堤が、まちづくりを考える上での一つの問題になっています。水際を水辺に変える９つの手法も、やわらかい発想でとてもよく考えられていたと思います。スーパー堤防をうまく補完するようなことも考えてもらっていて、僕たちも目から鱗のようなところがあります。プロの行政官として見てもなかなか面白い案で、すばらしいと思いました。

黒川純一良
国土交通省近畿地方整備局河川部長

臨港地区に着目してるのがすごく面白いなと思いました。臨港地区のゾーニングというは、要するに水辺の土地利用と、まちと陸地とを一帯的に捉えたものなので、水辺の活性化を考えていく上で非常に面白い着目だと思います。実現に向けては、周辺の地主の方たちと合意形成をはかっていくような長期的なプログラムや、みんなが一緒に連携して進めていく仕組みが必要なのかなと思います。

嘉名光市
大阪市立大学大学院 工学研究科 都市系専攻 准教授

優秀賞 「渡船がつなぐまち」 大阪工業大学 北川聖華・東野健太・宮北祐輝



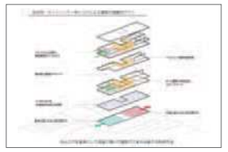
河川と都市計画をずっとやってきた行政官としての視点ですが、現地に特殊堤があるが、それをうまくクリアするために、水辺にアクセスする所をよく現地調査して考えているなと思いました。地域の合意ができたら社会実験で即動き出せるんじゃないかなと思うような提案で、感心しました。

黒川純一良
国土交通省近畿地方整備局河川部長

ちょうどUSJと天保山あたりを結ぶ渡船の有効活用についてですが、具体的で面白い提案でした。縦割りのもとでのバラバラな管理や運営というのは、いま日本の行政でよく起こっていることですが、それを繋ぎ止めるシステムを提案されてる点が、特に面白いなと感じました。

武田重昭
大阪府立大学 生命環境科学研究科
緑地環境科学専攻 助教

優秀賞 「Normcore City」 大阪市立大学 渡辺匠・三好章太・李恩恵・金田聖輝・富永彗・堀部芳樹



非常に面白い提案でした。一個の建物が建て替わっても、それだけだと豊かな空間は生まれない。建物の建て替えに長期的な視点やインセンティブが必要になりますが、これが実現できたら、豊かな空間が川辺にもでき、街区にもオープンスペースできるし、とても素敵だなと思います。

久保田善明
京都大学大学院
工学研究科社会基盤工学専攻 准教授

「Normcore」とは「超普通的な」というニュアンスで、提案のいたるところで利いているユニークなスタンスだと思います。それを踏まえつつ、今回の設計演習の共通テーマでもある「水」「アーバンデザイン」「エリアマネジメント」がバランスよく盛り込まれた、良い提案だと思います。

前田茂樹
大阪工業大学 工学部 建築学科 准教授

近畿地方整備局長賞 「つむぐ水際 ～菟道における親水空間の提案～」 関西大学 倉本義己・村上真央・中山絵理奈

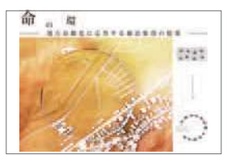
京都の宇治市、菟道についての提案ということですが、ここの治水上の目的は二つあって、一つは宇治川の水位が高くなった時に市街地を守ること。もう一つは、地盤が低い市街地に降った雨を上手に宇治川にポンプアップすること。それらをよく踏まえた斬新な提案で面白いですね。

黒川純一良
国土交通省近畿地方整備局河川部長

関西大学の設計演習は、ブラウンフィールドの再生が課題で、産業的に放棄された場所を新しく活用していく提案を行う演習なんですが、そのような課題を含んでいる対象地まで自分たちで探してきている点も、リサーチ段階から体験・学習することができて良かったと思います。

嘉名光市
大阪市立大学大学院 工学研究科
都市系専攻 准教授

ニラモン・クンスリソムバット賞 「命の環 ～地方高齢化に応答する療治集落の提案～」 立命館大学大学院 廣田竜介



琵琶湖からほど近い集落で、直径 300mの円形をうまく使った再生についてですが、様々な角度から高齢者を捉えた話をしているから、単純に言うと各施設間の動線を短くしたくなるけれど、そういう機能的な意味だけではなくて、仏教観や生死観を含んでる感じが面白い。

ニラモン・クンスリソムバット
チュラロンコン大学 建築学部
地域都市計画学科 准教授

美しいフォルムのプランだと思います。繋がっているけど、墓地を距離的に離したいなど、円形にした理由も整合していて良い。円形は、周の長さに対して中身のボリュームが大きくなるので、中身の活かし方もあると、さらに形の説得力があったかなと思いました。

伊藤香織
東京理科大学 教授／
東京ピクニッククラブ 共同主宰

伊藤香織賞 「動きのある風景 ～兵庫県西宮市における賑わいを生むスポーツの軸の提案～」 関西大学 片山 湧・郡司浩和

自分達がすごいワクワクしながらやってるっていうのが伝わってきて、とても魅力的。カヌーやジョギングなど、もう少し広域的な活動、カヌーもここから行ってどうするとか、ジョギングであれば、どことどこが繋がっているとか、そういう広域の計画もあると更によくなると思う。

伊藤香織
東京理科大学 教授／
東京ピクニッククラブ 共同主宰

スポーツももう少し分析していくと、もっと上の世代の人達は異なるスポーツをしたいかもしれない。また健康から建築や都市計画へアプローチする人ってあんまりいないので、もう少しここから発展させたら、色んな考え方ができると思う。すごく面白かったです。ありがとうございました。

福岡孝則
神戸大学大学院
工学研究科 特命准教授

佳作 「倉庫をかえる まちをつくる」 大阪工業大学 新 拓也・田中翔貴

大阪湾の天保山や海遊館のある築港地区という、都心部からもほど近い港湾物流エリアでの提案ですね。平日は倉庫として使って、休日は市場として開くという、倉庫を使い続けながら開いていく、新たな機能を付加していくという提案が、とてもユニークだと思いました。

堀口徹 立命館大学 理工学部 建築都市デザイン学科 准教授

佳作 「めぐる水・人・まち」 関西大学 山口侑香・米崎綾夏

内湖の水質浄化は、いい所に目をつけたと思います。本当は内湖に溜まったものを出せたらいいですが、それはものすごく労働集約的で、現在とは逆行する仕組み。パイロットプロジェクトとしてのゆりかご水田と考えると良いですね。また、流速まで踏まえた8つの浄化パターンは面白い。

黒川純一良 国土交通省近畿地方整備局河川部長

佳作 「内湖集落 ～時を刻む人と堤防～」 立命館大学大学院 幸田進之介

葦でつくった住居ユニットは非常に軽そうで、上から吊ってあり、浮遊感なども目指されていて良いと思いました。ただ、それに対して大屋根がすごく重そうで強いフォルムになっている。もうちょっとそこを軽く見せるような洗練が必要なのではないかと思いました。

ニラモン・クンスリソムバット チュラロンコン大学 建築学部 地域都市計画学科 准教授

「葦舟で結ぶ風景」
京都大学 牧田裕介・川崎誠登・三輪潤平・水野剛志・岩本一将

「海へ 屋外劇場を内包する立体的地形の提案」
神戸大学 塚越仁貴

「Escape to the Oasis 水辺をランチバスがゆく」
神戸大学 馬場智美

「掘湯う。箕帯する。
1000 人の漁業を中心とした集落による琵琶湖環境維持と生業の成立」
大阪工業大学 前田研究室 宮北祐輝・東野健太・北川聖華

「山守のつくる風景としての生業
奈良県川上村における林業集落のたたみ方」
関西大学 蔡 昂・中田喜之・村田裕介

「まちの結び目」
神戸大学 後藤沙羅

基調講演

水辺の未来を語るためには、まず過去を振り返ることが重要である。

私が水都大阪の取り組みに深く関わり始めたのは、21 世紀に入った頃でした。近年の大阪の水都再生は 2001 年頃にはじまり、「水都大阪 2009」で大きな盛り上がりを見せました。しかし、もっと時をさかのぼって過去を振り返らなければ、水辺の未来を語ることはできません。
約 50 年前、私は東横堀川や道頓堀川の近くの大阪のミナミで生まれました。その当時の川は非常に汚く、大雨が降れば建物はしばしば水につかってしまうような安全とは言えない状況でした。30 年ほど前、大阪大学の博士課程で環境工学を研究していたときは、大阪の水辺再生が研究の大きなテーマでした。当時の先生方が中心となり、世界の水辺の最新事例を研究し、大阪の全ての川筋を歩けるように変えていこうという考え方が提案されたのがこの頃でした。そして、ほんの 10 年前ほど前ですが、川沿いにはブルーシートのテントが立ち並んで河川空間を占拠して、観光客も子どもたちも気軽に水辺に近づけない状況が、大阪の都心部の一番大事な場所にありました。私が大学院にいた頃、当時の先生方がこれからの水辺を再生していくんだという話をされていましたが、自分自身も実際に動くには至らなかった。しかし、15 年ほど前から、この状況を本当に変えて行かなければならないと思い立ちました。

大阪が繁栄を極めた時代

さらに歴史をさかのぼり、明治の頃ですが、大阪には素晴らしい川筋がありました。ただし、それは観光などということではなくて、日々の生活の中にごく当たり前に存在していました。川は、人々がくつろぐ場所ではなくて、生業（なりわい）そのものでした。現代の私たちは、生活のなかで、川筋や水辺を使うということを忘れてしまっています。当時は、川に面した劇場や料亭があったり、道頓堀川のほうでは商人たちが利用する旅館街が並んでいました。そこには川にアクセスする桟橋などがあり、川筋と街の暮らしが非常にうまくつながっていました。しかし、まだ川は汚く、大雨など災害のたびに水が溢れてしまうような状況でした。
大正・昭和初期になると、大阪は市域拡張し、大大阪と呼ばれる時代になりました。この時代、大阪は産業・ビジネスの都市としてますます発展しました。この頃までは、観光という視点はそれほど重要視されてこなかったのですが、昭和 10 年になると、大阪市が観光部門を設置します。
昭和 11 年には、観光船「水都号」が導入され、教育旅行やビジネス視察旅行にも注力するようになりました。
この頃、中之島の周辺はパリの都心部の水辺を意識した再整備がなされ、いくつもの堂々たる公共建築が水際に立ち並びました。また、なにわ橋近くは、ウォール街に匹敵するような株と証券の街で、東洋のシカゴ、ニューヨークというような評価が出て、高いビルが続々と立ち、アメリカの都心にあるような風景が大阪にも生まれました。水辺というものが、観光のための大事な景観として、この時期意識されるようになりました。
ここで、昭和 12 年の大阪市産業部観光係制作の貴重なプロモーション映像「大大阪観光」からは当時の様子をうかがうことができますので、水辺の風景をご覧いただきたいと思います。（「大大阪観光」上映）

ちょうどこの頃、海外からの観光客を受け入れるために、名所旧跡だけでなく、ビジネスや教育的な視察に力を注ぎ、当時世界第 5 位ほどの人口を誇った大阪の姿を示そうと観光政策が打ち出されました。しかし、こうした繁栄の中の当時においても、大正 6 年の水害や、昭和 9 年の室戸台風の風水害があったという点を忘れてはなりません。
当時、世界の素晴らしい都市の風景と匹敵するんだということで、都心部に魅力的な建築群を築き上げてきました。今だったら、煤煙だらけだと言われるような街の風景ですら、当時は産業の都のランドマークとして巨大煙突群を掲げていました。道頓堀の夜景、そしてネオンサインのかき船が浮かんでいたり、いかに他の街にはない風景をつくるかということに、先人たちは注力してきました。
しかし、高度経済成長期にさしかかると、川の上には高速道路が建設され、上流からの工業排水や生活排水の流入により、都心部の川は汚れていきました。この状況をいかに変えていくのかというのが、私のライフワークです。

世界の水辺再生

世界の都市がそうであるように、課題があるからこそ、それを乗り越えて、まちを魅力的にしていった歴史があります。アメリカのサンアントニオもそうですが、問題があったが故に、外から来た人が安全に楽しめる魅力的な水辺をつくり始めることができました。また一方で、観光向け施設の整備をきっかけに、川の魅力を取り戻すという動きもあります。バンコクの川沿いに近年整備された商業施設「ASIATIQUE THE RIVERFRONT」のように、川筋の新しい観光集客拠点がその街の顔になっていくということが、いま世界の各都市で起きています。シンガポールでは、10 年ほど前に、かつて産業のための倉庫街として使われてきた川筋を観光に切り替えました。またロンドンでは、テムズ川沿い、中心部の市街地の対岸の、かつて産業用に使っていたエリアを、魅力的な商業施設・オフィス群などに変えていっています。

世界中の各都市が、かつての産業の中心、いわゆるブラウンフィールドだった水辺を、魅力的で誰もが楽しむことができる場所に再生しています。大阪も、世界中の人たちが視察に来るような、そういう街に変えていかなければならないと思います。

大阪の水辺再生と、水都再生マインドの継承

ほんの 10 年前までは近寄りがたい場所だった大阪の水辺も、整備が進み、随分と風景が変わってきました。河川法の緩和があり、水際に店舗を出すことが可能になり、2009 年頃には中之島バンクスや北浜テラスが整備されましたが、これらは徹底した治水ができているがゆえに実現しています。またこの時期、再整備された中之島公園を主会場に「水都大阪 2009」が開催されました。これらの取り組みは単なるイベントとしてやるのではなく、大阪の水辺がどう変わったのかということを、未来に向けて伝えていくための契機にならなければ意味がないと思います。
かつてのような水辺に背を向けた風景に戻しては断じてなりません。若い世代のみなさんには、30 年後、50 年後に向けて、大阪がどんな水辺になっていればいいのかということを、自らの事業として、水辺を本気で変えていくんだという想いを持ってほしいと思います。多くの方たちが協力することで川筋は魅力的になっていきます。大阪も都心部が空洞化して人が住まなくなったがゆえに、アクションが始まりました。最後に、将来のまちの絵姿を描くためには、そのまちが歩んできた過去を振り返ることが重要であることを伝えて終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

橋爪 紳也 （はしづめ しんや）

大阪府立大学 観光産業戦略研究所 所長

1960 年大阪市生まれ。京都大学工学部建築学科卒・大阪大学大学院工学研究科博士課程修了、建築史・都市文化論専攻。工学博士。大阪府立大学 21 世紀科学研究機構教授、大阪府立大学観光産業戦略研究所長。大阪市立大学都市研究プラザ特任教授。『「水都」大阪物語』『ツーリズムの都市デザイン』『瀬戸内海モダニズム周遊』『大京都モダニズム観光』など、都市や建築に関する著作は 50 冊を越える。イベント学会副会長、大阪府河川水辺賑わいづくり審議会会長、光のまちづくり推進委員会会長、京都観光振興計画 2020 マネジメント会議委員長、大阪商工会議所都市活性化委員会委員長など兼職多数。水と光のまちづくりを始め、関西における観光集客政策立案や都市再生に関するキーパーソンとして活躍。

battle talk

3日目のバトルトークセッションでは、ランドスケープデザイン、建築、都市計画など、幅広いフィールドで活躍する豪華パネリスト陣をお迎えし、民間と行政という立場を超えて、それぞれの立場から考える水辺の将来像をぶつけ合うバトルトークを展開しました。

司会進行
忽那裕樹 ミズベリング世界会議 in OSAKA プロデューサー
山名清隆 ミズベリング・プロジェクト事務局代表

パネリスト
藤井政人 ミズベリング・プロジェクト アドバイザー／国土交通省所属
伊藤香織 東京理科大学教授／東京ピクニッククラブ共同主宰
橋爪紳也 大阪府立大学 観光産業戦略研究所所長
伴一郎 伴ビーアール株式会社 代表取締役 ／ 天神祭美化委員長
藁田博行 大阪府 都市整備部 河川室 河川環境課 課長
福岡孝則 神戸大学大学院工学研究科 特命准教授
嘉名光市 大阪市立大学大学院 工学研究科 都市系専攻准教授
筋原章博 大阪市大正区区長

忽那：まずはじめに、みなさんには自己紹介も含めて、水辺の魅力やあるべき姿、水辺との関わりについてお話をうかがいたいと思います。では藤井さんからお願いします。

藤井：私は国土交通省の職員をしておりまして、2年ほど前から山名さんと一緒にこのミズベリングプロジェクトを始めました。みんなの水辺への関心を高めたいという思いがあるのですが、その意識を変えるためには、まず河川管理者側から変わらないといけない。そうすることで、これからの水辺の未来が変わっていくのではないかと考えています。

藁田：私も行政として 30 年近く河川業務に携わっているのですが、作ったところを使ってもらえない悲しさというのを経験してきました。使ってもらう人のことをイメージして、行政側が何をつくるのかということが大事で、それを考えないとミスマッチが起きます。府民の方たちも、役所に対して、あれを作れこれを作れと言うのではなくて、自分たちに何ができるのか、というイメージを持ってもらいたいですね。

嘉名：2007 年頃から水都大阪に関わっています。水都大阪としては「第2ステージ」の段階だったと思います。その当時はハード整備は整いつつあったんですが、まだまだ住民の方たちからの関心が追い付いていない状況でした。そういった時期から関わり始めて、これまで大阪の水辺のまちづくりに携わらせていただいています。

伊藤：私は大学で都市研究に携わっていて、これまで 226 の都市を調査してきましたが、魅力的な水辺が出来て、そこからまちが変わった、という事例をたくさん見てきました。東京ピクニッククラブは、公共空間を創造的に使いこなしていこう！というアクションで、“その街らしい場所”というのを見つけて、世界のいろんな場所でピクニックを展開しているのですが、この活動の中でも、自ずと水辺のある場所が増えてきていることを実感しています。

筋原：大阪市大正区長の筋原です。現在大正区では、尻無川沿いの河川敷で、大正リバービレッジを展開しています。対岸の京セラドーム大阪には、年間 200 万人ほどの来場者があって、みなさん大正駅を利用されているんですが、素通りされているという状況があったんです。集客のための施設やイベントも実施しましたが、それだけではまちの日常生活を変えるには至らないということを痛感しました。ですから、リバービレッジは、その 200 万人の人の集まりと大正の街の日常生活をつなぐ場になってほしいという思いでつくっています。

福岡：いま神戸大学で教えているんですが、日本に帰ってきて3年くらいになります。もともとは神奈川県の海の近くで生まれたんですが、フィラデルフィア、サンフランシスコ、シアトルと、最後はドイツの湖沿いの村で暮らして、これまでランドスケープデザインの仕事に従事してきました。水や水辺に関しては、仕事を通して様々な関わりをしてきましたが、例えば、中国ではゴミがたくさん流れている汚い川があったり、また中東では、水がないので夜露を集めて水をつくるという地域もある。そういう水にまつわる問題というのは、世界共通なんですね。日本に帰って来て感じたのは、身の回りに水がたくさんあるのに、どうしてこんなに遠い存在になってしまっているのかということでした。

伴：天神祭に関わって30年、もう 50 年ぐらい水とともに暮らしています。とくに天神祭は、日本全国 1200 社の天神社があるんですが、大阪天満宮を中心に大阪で行われる天神祭は、水を使う水上祭では世界一です。民間の協力によって毎年 10 億円ものお金を使って、この日は水辺に 100 万人が訪れるんです。これが 1063 年続いている。本日の会場も水辺のすぐ近くですが、この堂島は福沢諭吉生誕の地なんですね。蘭学やデレーケ、ラバーダックといった、オランダとのつながりなど、水辺にまつわるおもしろい話はたくさんあります。こうした水辺にまつわるストーリーをつむぐ PR 活動をしています。

橋爪：私は、大阪のミナミで生まれ育ったんですが、都市が拡張していくときというのは、水路や川の外側へドーナツ状に新地などを作っていくんですね。そしてその水路や川は、新淀川しかり、当然人口的に整備したものですが、例えば百年後とか長い時間が経つと、自然のものとしてとらえられるんですね。だから、次の時代に対して新しいアイデアを持って、その時代に必要な水との関係性を絶えず語らなければいけないと思います。大阪は日本ではベストプラクティスだと思いますが、世界の幅広い事例から見るとまだまだだと思います。他の成功事例を真似るのではない、他の街をいかに乗り越えていくか、というクリエイティブなまちづくりが求められていると思います。

忽那：みなさん、ありがとうございました。1日目のディスカッションでも感じたことですが、それぞれの都市の問題や地域性をきっちりと捉えて、その特性に真摯に向き合って都市をつくっていくということが、パリ、バンコク、サンアントニオも共通していると感じました。1日目のディスカッションでの論点や、各都市の展望などについて、少し報告も交えて、嘉名さんの方からお願いします。

嘉名：1日目は、4 都市からのプレゼンテーションとディスカッションでしたね。パリは、水際の高速道路をビーチに変えるプロジェクトなどを行われているんですが、すべての取り組みが、まちを変えていく「実験」なんだということを強調されていました。またその背骨にあたる重要な要素が水辺であるとおっしゃっていました。既に完成形があるのではなく、先が見えない部分もあって試行錯誤だけれども、時代に合った都市に変えていかないといけないんだ、という姿勢に、潔さみたいなものを感じました。
サンアントニオでは、観光や舟運で昔から非常に有名な都市ですが、運河での成功をサンアントニオ川に広げていっているんですね。また水辺とまちを一緒に考えていくエリアマネジメントやまちづくりを、部局の分け隔てを越えた仕組みを持ちつつ展開しています。一年を通して、いつでも何かイベントがおこなわれていたり、住民とのワークショップなどもさかんにおこなわれているのも特徴的でしたね。バンコクは、まさに今現在進行形でまちづくりが進んでいます。アーバンデザインセンターを置いて、様々なステークホルダーに、水辺からまちづくりをしていくことの重要性を発信されているんですね。これは、コミュニケーションを大事にするミズベリングの動きに近いと思います。各都市での取組みにおいて共通する部分もたくさんあって、興味深い話

を聞かせていただくことができました。
いま、大阪をはじめ日本各地でも、パリのように、時代に合わない規制を変えていくための社会実験を実施する動きがたくさん出てきています。ただし、その規制緩和というのも、本当に使いこなす住民や事業者がいてこそ実現する話なんだと思いました。

忽那：いま規制緩和という話が出ましたが、藤井さん、どうでしょうか?

藤井：規制緩和と一言で言っても、何が「規制」なのか? という話があるんですが、規制範囲内と緩和部分を単に線引きするだけではなくて、その両方を理解してもらう取り組みも重要ですね。そして作るだけでなく、その場所を育てることをしないとうまく機能しない。そこに民間の事業ノウハウを活かすことも必要ですよね。あるいは、ソーシャルデザインの考え方で、個人で考えるだけでなくて、いろんな立場の人と一緒につくっていくことで、新しいことが生まれるきっかけにもつながる。そうやって、市民の使いこなしが実現していくと思います。

忽那：ありがとうございます。規制緩和だけではなくて、これから新しいルールをつくっていくんだ、ということも今日は議論をしていきたいんですが、どうでしょうか?

山名：僕がミズベリングをやっていて感じることは、やっぱり、先行した規制緩和だけでは、水辺の使いこなしは始まらないんですね。一昔前の川はそうじゃなかったかもしれないけど、今は、川に出ると人は笑顔になれるという時代に変わりつつある。藤井さんのピクニックの取組みなどもそうですが、そういう実験的な取組みが色んなところで始まっていて、みなさん楽しそうに取り組んでいる人が多いという印象があります。そして、水辺に関わっている人たちは、境界を越えようとしている人や、自らの領域からはみ出している（決して飛び出してはいない）人が多いなと思います。そういう覚悟を決めている人たちのチャレンジを応援したいですね。PR業界なども、そういうことに挑戦されていると思いますが、伴さんどうでしょうか?

伴：私は 30 歳までは役人をしていたんですが、今は民間と行政の間に立って、行政だけあるいは民間だけではできないことを実現するというスタンスでいたいと思っています。世界初のアルミニウム製リチウムイオン電池船は、当初は国が認めてくれなかったんですが、度重なる安全性の交渉の結果、実現したんですね。そして現在は、世界中からこの船を見るために視察に来ている。この事業は、補助金をあてにせず、企業の CSR や株主、比較的自由な中小企業からの支援によって成立しています。

山名：なるほど。大阪は、ラバーダックを浮かべた芝川さんもそうですが、挑戦する商人（あきんど）が多いですよね。そういう企業家たちと調整する行政はどのように向き合っているんでしょうか?

藁田：こういうオフィシャルな場では発言しづらいんですが（笑）やはり河川管理者の窓口を訪ねると、あれがダメこれがダメとなることが多いと思われてるんですが、そういう法律や規制は、行政上何かリスクがあるから作られているものなので、そのリスクをうまく回避するために、行政と民間の利害が一致するアクションとはなにかということを、お互いに腹を割って話し合えると、議論は前向きになると思います。例えば、草刈りの費用が捻出しづらい河川管理者がいて、一方で、草を刈るのでそこを使わせてほしい、という市民がいる。そうすると、じゃあその人にその場所を任せてしまえばいいじゃないか、ということになる。そういう話し合いができるテーブルが重要だと思います。

忽那：それがまさに新しいルールが生まれる瞬間だと思いますが、サンアントニオではどうなっているんでしょうか?

福岡：サンアントニオ市では、リバーオーソリティーのもとでサンアントニオ運河から南北へ延びるサンアントニオ川へ活動を拡大させていて、大阪で言うと、ロの字型の水の回廊と淀川の関係ととても似ていると思います。サンアントニオも、日本の河川と同じように、草地管理などの問題はあるんですが、僕がおもしろいなと思ったのは、氾濫原というのは、本来そうやって草が生えてくるものなんだという認識のもとで、周辺の子供たちを中心に、彼らを戦士（ウォリアー）に見立てて、草を刈ったりすることを川の自然と向き合う「訓練」として管理を展開しているんです。そうやって、地域愛の醸成をおこなう場として活用しているんです。

忽那：アメリカにも当然、縦割り行政が存在しているなかで、サンアントニオのリバーオーソリティーは多くの市民参画の団体をサポートをしているんですよね。もちろん治水も考えながらですが、それに対する経済効果や投資効果を考える部署を分けているんですよね。それがうまく連携しあっているのが、とても面白いなと思いました。

福岡：僕はこのミズベリング世界会議の件で、スティーブン・シャウアーさんと一緒に日本をまわる機会があったんですが、日本の行政マンたちが、シャウアーさんに対して、本当に行政の方ですか? と何度も質問をされていたのが印象的でした。正確に言うと、リバーオーソリティーは行政と民間との中間的な組織で、予算の権限は持っていないんですが、河川調査や水質検査、生態系の把握や経済モデルの検討などから、戦略を立てる部局なんですね。

山名：お話を聞いていると、もうビジネスマンみたいですよね。「役所の人っぽくないですね」と言うと、すごく嬉しいとおっしゃっていましたが、日本国内ではまだ、彼のような動きがとれる行政マンは少なくて、これからはそういう人材を育てていく必要があると思います。

福岡：日本では、建築・土木・ランドスケープなどの分野で集まることはあっても、政治や歴史、経済や生態学の学者までが集まるプラットフォームはまだ少ないですよね。でも、水について語ろうとすると、いろんな立場の方が関わることができる。その多様な関わりを支えるプラットフォームづくりがとても重要で、それを維持するためにはマネジメントが必要となってきますよね。

忽那：それを実践されているサンアントニオのリバーオーソリティーは、なぜうまくいってるんでしょうか?

橋爪：サンアントニオは、都市再生の必要性に迫る、中心部の空洞化に対する危機感が大きかったんですね。そこから、毎日のイベントから舟運事業などを、民間に運営を任せつつ、その収益で港などの整備やまちの魅力を上げる仕組みが生まれた。また仮にその企業が倒産しても運営資金を確保しておくなど、様々な配慮がなされています。サンアントニオの事例は何十年も前から、日本の行政も何度も視察に行っていたけど、なかなか実現できなかった。大阪もサンアントニオを意識した整備を道頓堀などで展開していて、道頓堀はそれが成功した事例だと思います。

藁田：実は道頓堀の整備に携わる際に、多くの方から「サンアントニオを見に行ったか?」と聞かれたんですが、ミナミでカニやフグが飛び交っている状況のなか、サンアントニオを見てしまうと、そのイメージが変な先入観になるんじゃないかというのを恐れて、あえて見に行かなかったんです（笑）ただし、制度はしっかり学びました。サンアントニオのやり方は、廃川した更地のようなところへ大型ショッピングスーパーを持ってきたようなカタチで、収益の半分をエリアのマネジメントに投資する仕組みなんですよね。ただやはり、この仕組みを、既存商業が密集する道頓堀で実現することは難しいと思いました。現在、道頓堀は公募で選定された運営主体がマネジメントを行っていますが、エリアマネジメントの制度としては初めての試みで、一定の評価を受けることができたのではないかと思いますね。

橋爪：ロンドンでは、地権者の半数の合意のもとで、活動資金が徴収されて、清掃や治安、観光魅力アップなどのマネジメントを、川沿いの地区ごとに互いに競わせている仕組みがあるんです。やはりボランティアベースではなくて、財源を確保して、川沿いのエリアマネジメントをおこなって、収益をあげていくことが大事ですね。

嘉名：規制緩和や、BID による財源確保は当然大事ですが、大阪だと場所によってもそのやり方は異なりますますよね。いま大事なのは地域の人々が、水辺を使って何か面白いことにチャレンジできたり、それがまちの活性化につながっていくことが大事だと思うし、それを実現するための方法は、既にかなり用意されているんじゃないでしょうか。

忽那：大阪でも、水辺のBIDを使ったエリアマネジメントをやりたいというのはずっと思っていますね。

嘉名：シャウアーさんの発言で印象的だったんですが、「行政は市民の要望に必ず応える組織である」とおっしゃっていたんですよね。それを実現するために、市民とのミーティングを何回もおこなって、市民の声を集め続けている。彼らはリバーオーソリティーの運営に必要な意見をくみ取る場を持ち続けているんです。

福岡：その意見のくみ取りを、パリでは「サービス」と言っていましたね。行政は、市民の意見の実現をサポートする立場であって、そういう方向にシフトしていってる、と。

伊藤：私は、2002 年に東京ピクニッククラブを始めたんですが、やっぱり、良い公園って少ないんです。芝生が立ち入り禁止とか、夕方に閉まってしまうとか、とても不自由なんです。そういうこともあって、当初は都市の緑地を開放せよ! みたいな活動をしていたんですが、続けていくなかで感じたのは、ユーザー側も想像力が不足して、ニーズを出しきれていないということです。だから、オシャレに使いこなす「ピクニック」を流行らせることで、ユーザーを育てていくほうが早いのではないかと考えるようになりました。

山名：これを公共空間でやらせろ! というのではなく、こんなのもあっていいんじゃないですか? という、やわらかいアプローチがうまいですよね。対話が生まれるきっかけを作っているというか。

伊藤：ピクニックの活動は、世界各地に出向いて行っているんですが、一回きりで終わるのではなくて、体験した人が普段の使い方に活かしてもらえればと思っています。

忽那：大阪でも「水都大阪 2009」の時から、イベントからの日常化を目指して、まちの使いこなしや市民活動の促進を行っているんですが、近年、中之島公園の芝生広場は日常的な使いこなしの風景が変わってきていて「水都大阪スタイル」を感じるほどの利用がされ始めていますね。

山名：公共空間を使って、こんなことができるんじゃないか? というような、アイデアやヒントがいっぱい出てきていて、それが日常的な使いこなしへと広がりつつありますよね。

忽那：そうですね。あと「おおさかカンヴァス推進事業」は、“まちをアートで使いこなす”アクションですが、作品の提案者はアーティストだけではなくて、例えば潜水士の人が水を使った作品を制作するとか、自分の仕事や持っている技術を活かした関わり方が生まれています。公共空間を使って、そんなおもしろいチャレンジができる。その場所こそが水辺である、ということに少しづつなってきていて、こういう気運が企業のビジネス参入などにもつながっていくと思うし、これをもっと盛り上げて、最終的には、BID にもつなげていければと思います。

嘉名：水都大阪で面白かった例として、中之島公園でヨガ教室をやっている人がいるんですね。ヨガは本来、ガンジス川のほとりでやるもので、スタジオや部屋の中でやるものではない、と。だからぜひ水辺でやりたいとずっと思っておられたんです。ところが、水辺や公園での営業行為は禁止されている。でも、風景を豊かにするアクションでもあり、現在、水都大阪では認めていく方向で動いていたんです。すると、私たちも中之島公園でヨガをやりたい!という団体がいくつも声を上げている。こうなってくると、Win-Winの関係が築けるし、笑顔が生まれて、ハッピーな状況がどんどんまちに広がってくる。

筋原：行政としては、民間が面白いことを考えてくれて、それをなるべく自由にできるステージづくりが大事だと思います。例えば、船の係留施設なんかでも、まずは収支計画から投資額を検討するんですが、杭の打ち方ひとつで初期投資も抑えられたり、事業をしやすい状況がつくれる。極端に言えば、まず収支を見て、そこからいくら投資可能なのか、そしてその投資の範囲内でできる方法で、規制緩和を認めていく、ということが大事だと思います。

忽那：民間が事業をはじめる際、イニシャル費用を抑えられる工夫や規制緩和はとてもありがたいですよね。大阪での舟運事業において将来的な取り組みはあるんでしょうか?

伴：尾道に、水上飛行機の海上格納庫を制作していて、3 億 5 千万円の水上飛行機 2 機を購入したんです。これはまだ夢の話ですが、それを使って、十三の防災船着場に着陸して、5 分で梅田までいける状況を作りたいと考えています。ちょうど江戸時代の海運ルートだった琵琶湖・淀川流域と瀬戸内海を水上飛行機で結びたいんです。大阪の1割はまだ水面で残っている。実は、大正・昭和初期の頃、日本は滑走路がないので、水上飛行機がブームだったんです。これを使えば、安治川から厳島神社まで30分で移動可能です。インバウンド対応で、チャーター飛行機の需要も見込める。

橋爪：煙突が建ちはじめて、それがなくなってから 80 年ほどですが、我々が忘れているだけで、かつては当たり前に使われていたんですね。

伴：60 年前までは船の時代だったので、また新聞社は東京も大阪もだいたい川沿いにあって、ビジネスマンも普通に水上飛行機を利用していたんです。

山名：いいですね! そういう、現状を突破するアイデアが出てくると、みなさん目が輝いてきますね。伴さんの素晴らしい水上飛行機構想のお話が出たところで、そろそろ全体のまとめに入りたいのですが、忽那さんどうでしょうか。

忽那：今回は、ミズベリング世界会議ということで開催しましたけども、本当に、日本全国だけでなく世界中から、水辺のまちづくりに取り組む、たくさんの人たちに集まっていただくことができました。世界中で進んでいる水辺のまちづくりの取り組みを、お互いに応援し合える仕組みのようなものがあればいいなと思いましたね。

山名：ミズベリングプロジェクトを始めてまだ2年ですが、こんな場が実現するとは思っていませんでしたが、活動を続けるなかで、自分も水辺を変えたいと思っていた! という人が日本だけじゃなく海外からも、どんどん出てきたんです。これからまだ出会ったことのない人たちとつながっていけるような場をもっともっとつくっていきたいですね。

忽那：はい。大阪でもこういった水辺の先進性を多くの人々と共有するためのスクールのようなものも展開したり、協働と共創を意識しつつ、水辺から都市を変えていければいいなと思いますね。都市の問題を解決するという真摯な思いから、それぞれの都市の「らしさ」を大切にしつつ、市民や企業の、夢や熱い想いから生まれる使いこなしのアクションを水辺から起こして、そこからまちを変えていけるといいですね。あと、規制は既に緩和されてきていて、あとは主体的に関われる人たちが増えればまちは変わっていく!というところを今回は共有できたと思います。

山名：そうですね。また、公共空間を変えていくという挑戦をしている職業が、面白い！カッコいい！と言われるようにしたいですね。今日来ていただいているゲストのみなさんに大きな拍手をお願いします。

ミズベリング世界会議のつくりかた

How To Planning Mizbering World Conference

ミズベリング世界会議は、たくさんの水辺ファンの想いとアイデア、智恵を結集して開催することができました。その開催に至るまでのプロセスを、今後の会議体開催に役立つノウハウとして、また水辺を活かしたまちづくりを進めていくためのヒントとして、その手法とポイントを整理しました。

1 仲間とつながる

POINT
ワークショップで想いを集めよう!

大阪だけでなく、全国各地で精力的に活動している水辺活動家や専門家、水辺を仕事にしている仲間とつながり、水辺の課題や将来像を、とことん語りあう。

2 チャレンジを集める

POINT
成功体験を集めよう!

ミズベフレンズたちがこれまでにトライアルしてきた、さまざまな水辺でのチャレンジを結集し、そのプロセスで生まれたアイデアや智恵、成果をノウハウとして整理する。

3 ミズベノウハウをブランディングする

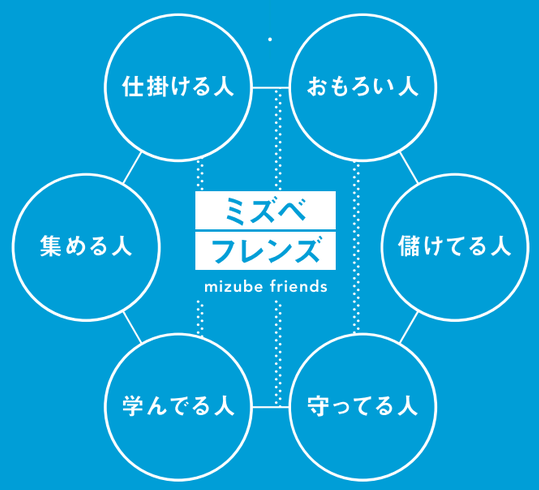
POINT
カッコよく見せよう!

結集した特殊解的なチャレンジノウハウを、いろいろな水辺で活用できるように一般化すること。また、より多くの人が憧れるようなアウトプットコンテンツをデザインする。

4 みんなに届ける

POINT
世界の水辺とつながろう!

大阪の水辺ノウハウや収集した世界の水辺情報をオープンにし、水辺で頑張る人や水辺が大好きな人はもちろん、まだ水辺の魅力を感じていない人にも、将来の水辺の可能性と価値を伝える会議を開催。



2014年に開催したミズベリング大阪会議で、170人の仲間を集め、これからの水辺のアクティビティ、ビジネス、シビックプライドについて想いを共有するワークショップを実施した。

ミズベのシンボル

ミズベでパフォーマンス

ミズベの規制緩和

ミズベを経営

MIZBERING OSAKA

ミズベのエリアマネジメント

ミズベをサポート

ミズベで結集

ミズベをフルオープン

MIZUBE BOOK!

人を巻き込み、まちに広げる展開を、実践者の目線で紹介!

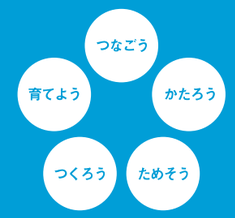
書籍化も・ブランディング・のひとつ!

「ミズベワークショップ」でのセッションテーマの原案がおさめられた書籍『都市を変える水辺アクション』には、実践者自らの経験をもとにした、水辺から都市を魅力的なものにしていくためのヒントが凝縮されています。ミズベノウハウを可視化しコンテンツ化することが、水辺の魅力を波及させ、都市を変えることにつながる!

「都市を変える水辺アクション 実践ガイド」(学芸出版社)
泉 英明・嘉名 光市・武田 重昭 編著 ／ 橋爪 紳也 監修

1 ノウハウの一般化

大阪の水辺でできたことは、どこの水辺でも実現できるはず! 大阪で集めた水辺ノウハウを全国で活用できる内容に一般化する。



ミズベリング
5つのアクション

2 ブランディング

チャレンジしたことがオシャレでクールに感じられることが、とっても重要。多くの人がやってみたいと憧れるよう、水辺ノウハウやコンテンツをブランディングする。

3 体感コンテンツ化

水辺のチャレンジをいつでも体験できるように、体験プログラムとしてコンテンツ化できれば最高! 大阪では、世界会議にあわせて水都大阪フェスを実施した。

ミズベリング 世界会議
MIZBERING
IN OSAKA 2015.10.9-11
WORLD CONFERENCE at DOJIMA RIVER FORUM

ミズベ体験プログラム

Mizube Experience Program

ミズベリング世界会議と合わせて、ミズベ日本一！の水都大阪をお得に体験できるプログラムが盛りだくさん！

ミズベリング世界会議 in OSAKA の開催に合わせて、淀川や大阪市内の水辺を体験・満喫していただける様々な体験プログラムを展開しました。

DAY1

ウェルカムナイトパーティ

Welcome Night Party

1日目のミズベシンポジウム終了後、大阪の水辺のイルミネーションなどを満喫しながら専用バスで移動。水辺を体感できる中之島公園内、期間限定で営業されている中之島オープンテラスにて、来阪を感謝し、めぐり合えたことを歓び合うパーティーを開催しました。終了後には、ラバー・ダックまで徒歩で移動し、みんなで記念撮影することができました。

DAY 2 DAY 3

限定招待 大阪ナイトクルーズ

Osaka Night Cruise

2・3日目の終了後、八軒家浜から大川をさかのぼり、淀川の手前にあたる毛馬閘門までの無料のナイトクルーズを開催。水の上を静かに航行することのできる電気船「あまのかわ」に乗船し、橋のライトアップや、水面に映りこむまちの夜景を楽しむことができました。

Pre Event

淀川アーバンキャンプ 2015

～ミズベリング淀川のはじまり～

Yodogawa Urban Camp 2015

「ミズベリングよどがわ」プロジェクトとして、グランピングキャンプやクルーズなど、都心にいながら自然が楽しめる、淀川活性化の実験事業と連携しました。ミズベリング世界会議 in OSAKA のプレイベントとしても位置付けられており、キタの摩天楼を眺めながらのイベントは大変盛況でした。

DAY 2

ミズベラバーズパーティー in 水都大阪

Mizube lover's Party

2日目のミズベワークショップ終了後、速やかに会場を転換し、国内外から集結したプレイヤーやプロデューサー達との交流や意見交換の機会が持てるパーティーを開催しました。余興として山本能楽堂による水都にちなんだ能楽の鑑賞や、大正区長による水都に対する熱い想いを感じられる演奏も楽しむことができました。

DAY 2 DAY 3

淀川大堰・毛馬閘門見学会

Yodogawa Kemakoumon Tours

淀川の歴史や、さまざまな治水・防災対策を学んでいただくため、普段は入ることのできない淀川大堰・毛馬閘門（水位差を調節して船の航行を助ける施設）を体感できる無料の見学会を開催しました。

All DAY

中之島漁港／中之島みなと食堂

Nakanoshima Fishing port

元港湾エリアでの公有地ビジネスによる、2年間限定のポテンシャルアッププロジェクト。活魚や鮮魚の販売や、海鮮 BBQ が楽しめるスポットとして、連携・紹介させていただきました。

All DAY

淀川舟運イベント

Yodogawa Ship transportation

淀川の歴史についての解説や「三十石船唄」を聞きながら、当時の舟運に思いをはせ、枚方・八軒家浜間の船旅を楽しんで頂ける舟運と連携しました。また、3日目におこなわれた学生提案表彰の副賞としてもご協力いただきました。

All DAY

大正リバービレッジ

Taisho River Village

準則特区による河川利活用の実証実験プロジェクト。大幅に期間延長されたので、ミズベリング世界会議 in OSAKA にあわせて来阪する参加者に、連携・紹介させていただきました。

ミズベリング世界会議 登壇者一覧

speakers list of mizbering world conference

忽那裕樹
ミズベリング世界会議 in OSAKA
プロデューサー

パトリシア・ペルー
パリ市都市計画アトリエ

橋爪紳也
大阪府立大学
観光産業戦略研究所 所長

ニラモン・クンスリソムバット
チュラロンコン大学 建築学部
地域都市計画学科 准教授

陣内秀信
法政大学 デザイン工学部
建築学科 教授

スティーブン・シャウアー
サンアントニオ リバーオーソリティー

八木早希
アナウンサー／
ミズベコンシェルジュ

坪田哲司
ミズベリング
二子玉川未来会議

佐井秀樹
一般社団法人 水都大阪パートナーズ
プロデューサー

牟田弘幸
ミズベリング
熊本白川会議

嘉名光市
大阪市立大学大学院
工学研究科都市系専攻 准教授

黒沼尚史
ミズベリング
富士川・笛吹川会議

新居 直
特定非営利法人
新町川を守る会 副理事長

泉 英明
有限会社ハートビートプラン
代表取締役

髙梨日出夫
一般社団法人 水都大阪パートナーズ
代表理事

山名清隆
ミズベリング・プロジェクト
事務局 代表

松本 拓
北浜水辺協議会理事

竹内治彦
岐阜経済大学 副学長

中西康博
関西・光のまちづくり から
奈良県 知事公室審議官

篠生政士
日本橋地域ルネッサンス
100年計画委員会 事務局次長

平山広孝
ミズベリング
岩原川会議

栗原道平
信濃川ウォーターシャトル株式会社
代表取締役社長

玉置泰紀
株式会社 KADOKAWA
ウォーカー総編集長

山﨑 学
NPO 法人 雁木組 理事

原 健二
淀川管内河川レンジャー
（高槻出張所管内）

杉本容子
株式会社ワイキューブラボ 代表

長瀬正明
東京ウォーカー編集長

古川 誠
オズマガジン編集長

木下 光
関西大学 環境都市工学部
建築学科 准教授

野口 隆
近畿地方整備局
河川部 広域水管理官

泉 友果子
タイムアウト東京
副編集長

福岡孝則
神戸大学大学院
工学研究科 特命准教授

武田重昭
大阪府立大学大学院
生命環境科学研究科 助教

中村裕子
大阪商工会議所
地域振興部 課長

田尾圭一郎
『美術手帖』編集部
アートニュースサイト「bitecho」
プロデューサー

森 なおみ
株式会社インプリージョン

大江幸路
水上バス株式会社
大阪シティクルーズ推進協議会
事務局長

黒川純一良
近畿地方整備局
河川部 部長

久保田善明
京都大学大学院 工学研究科
社会基盤工学専攻 准教授

前田茂樹
大阪工業大学 工学部
建築学科 准教授

梅田和男
淀川河川事務所 所長

一本松英三
一本松海運株式会社
NPO 法人 大阪水上安全協会 理事

藤井政人
ミズベリング・プロジェクト
アドバイザー／国土交通省

藁田博行
大阪府 都市整備部
河川室 河川環境課 課長

伏見たかし
枚方市 市長
淀川舟運整備推進協議会 会長

筋原章博
大阪市大正区 区長

伴 一郎
伴ピーアール株式会社 代表取締役
天神祭美化委員長

山田邦博
近畿地方整備局 局長

アピポーン・ワチャラシン
雑誌「イメージ」
エディトリアルスタッフ

堀口 徹
立命館大学 理工学部
建築都市デザイン学科 准教授

伊藤香織
東京理科大学教授
東京ピクニッククラブ共同主宰

おわりに

水辺の価値を知り、新たに魅力を生み出し、次世代に引き継いでいく。
その想いが国の内外を問わず結集した3日間でした。

1日目は、水辺の活動を支えるしくみの重要さを共有できました。観光都市の集客力を活かして上流環境と共に魅力づくりを計画、実行するサンアントニオ。水辺だけでなく社会環境の改善も視野に入れた協働のプラットフォームづくりを試みているバンコク。また、都市環境再編を新たな社会実験の積み重ねにより構築しようとしているパリ。そして、大阪からは、都市再生の要を水辺として広げてきた水都大阪チャレンジ。水辺の使いこなしを価値として繋ぎとめていく実践が報告されました。また、水辺という資産を活かし、まちを経営する考え方を導入し、より広く魅力を享受できる、新しい共有のしくみづくりが必要だ。という議論が提示できた有意義な時間となりました。
2日目のミズベワークショップでは、具体的な提案の積み重ねが大切だということを改めて実感できました。様々な立場で水辺に関わる方々のビッグワークショップ。会場全体と中継で結んだ水辺で、体感しながらアイディアが乱舞する瞬間に立ち会えたのです。メディアで編集に関わる人からも水辺の価値を発信する意義について具体的な展開が提示されたこと、地域独自の魅力あふれる提案が数多く示されたことは、今後の活動の励み、そして、協働する可能性が広がることを期待させてくれました。
3日目には、若い大学生の想いと力を感じる野心的なプレゼンを受け、実際に社会で実現するきっかけを得ました。また、水都大阪の歴史、文化を改めて知るとともに、これまで大阪の水辺を支えてきた方々の白熱した議論には、未来の水辺の資産の活かし方が満載であり、ひとつひとつの提案にリアリティーと夢が満ち溢れていました。

3日間を通して、提案、議論されてきた内容は、今後の活動を具体的に進めるための糧として共有できるようにします。
水辺には、自然があり、歴史があり、文化が育まれてきました。新たな使いこなしを支えて、魅力をつくり、次世代に引き継ぐことを改めて宣言したいと思います。水都大阪としても、今後、淀川から水の回廊、そして、港湾地区まで水辺の魅力をつなぎとめ、新たな都市の魅力を国内外に示すことができるようにしようではありませんか。都市を変える水辺からのアクションが、都市の使いこなしを広げ、世界に発信していくまちのプロジェクトを立ち上げ、それらが、住まい訪れる人々の積み重ねにより、愛着と誇りにつながることを願い、実現していくことを、今回、会議に参加いただいたすべての皆様と想いを共有することをもって、今回の会議の宣言とさせていただきます。
最後に、この会議を支えていただいた方々に感謝を申し上げるとともに、みなさまの今後の活動が魅力ある展開となることを願ってあいさつに代えさせていただきます。また、ミズベで会いましょう。

ミズベリング世界会議 運営会議

全体アンケート 集計・抜粋

questionnaire & data

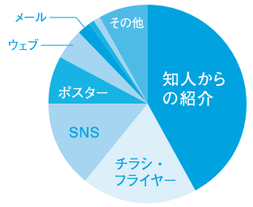
来場者数

1日目
ミズベシンポジウム
446 名
ウエルカムナイトパーティー 46 名

2日目
ミズベワークショップ
234 名
ミズベラバーズパーティー 95 名
大阪ナイトクルーズ 29 名

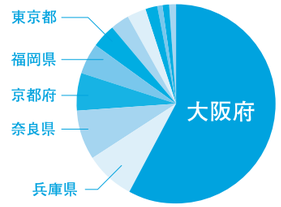
3日目
ミズベ未来アクション
180 名
大阪ナイトクルーズ 15 名

何でお知りになりましたか？



知人からの紹介	42%	ウェブ	5%
チラシ・フライヤー	19%	メール	2%
SNS	14%	新聞広告	1%
ポスター	8%	雑誌	1%
		その他	1%

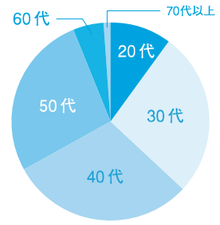
どこから来られましたか？



大阪府 58%

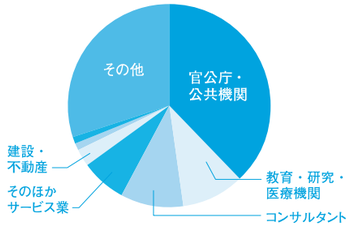
兵庫県	8%	東京都	4%	島根県	1%
奈良県	8%	滋賀県	3%	山梨県	1%
京都府	6%	福井県	3%	神奈川県	1%
福岡県	5%	愛知県	2%		

世代分布



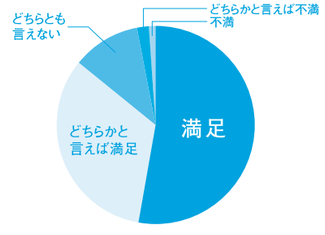
20代	10%	50代	27%
30代	27%	60代	5%
40代	30%	70代以上	1%

業種別分布



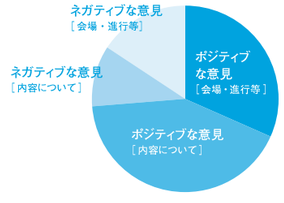
官公庁・公共機関	38%	建設・不動産	3%
教育・研究・医療機関	10%	製造業	1%
コンサルタント	10%	ITベンダー	1%
そのほかサービス業	7%	その他	30%

満足度



満足	53%	どちらとも言えない	11%
どちらかと言えば満足	33%	どちらかと言えば不満	2%
		不満	1%

アンケートコメントの分類



ポジティブな意見［内容について］ 42%
海外事情が興味深かった／専門家の数が多く、話題が豊富／ミズベに対する実情を知れた

ネガティブな意見［内容について］ 11%
一方通行的だった。参加者も巻き込むべき／夢のある話もほしかった／パトルトークという感じではない

ポジティブな意見［会場・進行等］ 32%
多チャンネルの試みがよかった／演出がよかった

ネガティブな意見［会場・進行等］ 15%
展示を見るには暗かった／進行が話す時間が長い／同時通訳が聞きづらい

DAY 1 ミズベシンポジウム アンケート（抜粋）

各国各都市の取組、変遷を初めて直接聞ける機会として良い会議だった／それぞれの都市の取組、ビジョンを知れた／世界各国における水辺の開発、取り組みが非常に良くわかった。今後の都市作りや開発に参考となったと思う／世界の事例がわかり、トークセッションもよかった。大阪の水辺はやはり素晴らしい／世界のミズベ整備に携わった方の話が直接きけたことが有意義だった／水辺のビジネスチャンスが広がる内容が組み込まれ、水運用、水管理もビジネスとなるようにうかがえた

DAY 2 ミズベワークショップ アンケート（抜粋）

複数グループの多様な切口の声を同時に聞ける新しい形式は楽しかった／川のあり方の新しい視点を教えてもらいました。新しいものを生み出すだけでなく、余分なものを減らして行く考え方は面白かった／インターナショナルなワークショップがそれぞれの地域で各地の価値と課題を十分認識した上で検討が進められているのがよくわかった／いろいろな視点で語られる話がおもしろかったです。水辺の利用の可能性を感じました／それぞれの立場から多様な事例紹介を聞くことができて良かった

DAY 3 ミズベ未来アクション アンケート（抜粋）

いろんな視点から“はみ出した”アイデア、夢を聞けた／アイデアだけでなく、実現的に進めていく力を感じとることができた／専門家の方々から実現できそうな具体的な夢を多く聞かせてもらえた／世界の水辺を知ることができた。これから建築を学ぶにおいて、水辺、アーバンデザイン、エリマネをもっと深く考えていきたいと感じた／ミズベリングの継続的なアクション、具体的な水辺活用のアプローチに期待／自分から一歩踏み出すこと、ユーザーの想像力はとても必要。学生さんたちに頑張ってほしい